

論
説

日々の生活世界における経験の構造(二)

小野坂

弘

目次

Ⅱ 日々の生活世界における経験の構造
はじめに

第一章 日々の生活世界における経験の構造——認知科学の立場から

一 人間は現実をどのようにとらえるのか

二 フレーム、スクリプト

フレーム

スクリプト

第二章 アーヴィング・ゴフマンの分析に見る日々の生活世界の経験

一 ゴフマンはどんな社会学者なのか

二 『共在』における経験の構造 A 第一次フレイムワーク

三 『共在』における経験の構造 B キーとキーイング

四 『共在』における経験の構造 C ファブリケーション

五 『共在』における経験の構造 D 活動の繫錨

第三章 アルフレッド・シュッツと生活世界

一 アルフレッド・シュッツの自然的態度の構成的現象学

二 人間行為の常識的解釈と科学的解釈——二重の解釈／論

三 多元的現実論

四 目的動機と理由動機

第四章 エスノメソドロジーによる日々の生活世界における経験の分析

一 エスノメソドロジーとは何か

二 背後期待

三 リアリティ分離

おわりに

Ⅱ 日々の生活世界における経験の構造

はじめに

(一) 生活世界とか日常世界と言う言葉は法学ではあまりお目にかからないけれども、法的紛争を含めた多くの紛争が起きているのがそこであることは言うまでもない。裁判はわれわれ日本人にとって日常的な場面とは考えられていないが、そこで行われていることはわれわれが日々の生活世界で行っていることと原理的に異なっているわけではない。

(二) ハロルド・ガーフィンケルが創始したエスノメソドロジー (Ethnomethodology) (後述) は日常的な実践に関心を持ち、日常生活の方法論を記述・分析する⁽²⁾。その主要な研究分野の一つである会話分析の創始者ハーヴェイ・サックスは言う⁽³⁾。「一種注目すべきことは、日常の会話において人々が何かの出来事について報告する場合、われわれの見るところでは起こったことではなくて、起こったことの日常性を報告するというやり方である。そのような報告は場面・行動・参加者の属性をあまり描かないが、出来事の日常性、普通であることを鮮明にするのである」。「このことは私が行いたいと思う中心的性質の主張に至らせる。あなたが世間で普通の人とはどんな人かについて何を考えようと、最初の機略は『普通の人』を何かの人としてではなく、『普通であること』を行うことを自分の仕事、自分の不断の任務とする誰かとして考えることなのである。……あなたが明らかに仕事——とにかく

分析的・知的・情緒的エネルギーを必要とする何もの——と考えるものの類推をただ広げるならば、その時にあなたは、たとえば、個人的な特徴などの全ての種類の名付けられた物事が成し遂げられた仕事であり、ある種の努力・訓練等を必要としたことを理解することができよう」。「中核的な問題は、人々がどのようにして『普通である』ことを行うことに取り組むのかということである。第一に、答えは簡単である。あなたが『普通の人である』ことを行うことに取り組むやり方の中には、いつものように考え、いつもの関心を持つというように自分の時間をいつものやり方で過ごし、その結果、その晩、普通の人であるために、あなたがしなければならなかったことは、テレビをつけることだけであるということがある。さて、秘訣は何かというと、それは沢山の普通の人々がやっていることをあなたが偶々やっているということではなく、『いつもの晩である』ことを行うやり方は、誰にとつてもそのようにやることであることをあなたが知っていることなのである。それはあなたが偶々、ほんとうに今夜はテレビを見ようと決めたというのではなく、あなたが今夜『普通である』ことをどのように行うかという仕事を行っていること、そのことに答えを見付けているということなのである」。「では、この仕事の一部はあなたが誰も／全ての人が普通であるように行うことを知っていることである。更に、あなたはそうするために利用できるものを持つていなければならない。そうするために利用できるものを持たず、したがって、特別に普通であることができない人々がいる」(以上四一四—四一五頁)。「自分達が居た場面が物語が可能な特徴を持つか否かを人々がモニターすることは十分に理解できると思う」(四一七頁)。「そして更に、普通であることの外へと冒険することは未知の良さとコストを伴う」(四一八頁)。「われわれは一連の物語が可能な人々、場所、ものを割り当てる。それらはわれわれとは違った何かを表している」。「論点は何かという、普通である仕事はほとんど全ての人のビジネスで

あるということ、人々は全てを全くいつもの通りに保つ仕事をしていること、何が起ころうと問わず、誰もが非常に多く、行われていることがいかに普通であるかをできるだけの努力で、ただそれだけを見付け出そうと従事していることなのである。そして実に驚くべきことは、本当に破滅的な出来事について『何も起きなかった』という感じを実現しようとする人々の努力を見ることがある」(四一九頁)。「人々が体系的に自分達が見たものを信用しないという事実は、『物事についてのそんな不思議な見方でもって、この世の中でどのようにして生きながらえるのか』としてではなく、むしろ、完全な経験的立場としてアプローチされよう」(四二二頁)。「そこで、経験の性格をその出来事の慣行的な地位に適合させるというこの仕事は、物語を語ることに於いて処理される」。「経験の一部がそれについて語ることを伴う限り、それについて語ることはあなたがその経験を私的に取り扱ったやり方が公開の呈示の統制に、それどころかあなたが友達だと思ふ者に委ねられる、その仕方を構成するのである」(四二八頁)。「さて、私はわれわれが普通であることに取り組むやり方を無くしてしまえなどといかなる意味でも言っているのではなく、むしろ、われわれはそれが持つ重要性を知りたいと言っているのである。少なくともわれわれが取り得る方針の一つは、われわれが——私のデータ、あなた自身の経験において——出会う物語の圧倒的な陳腐さをたとえば、変異の統計的分析を許し、あるいはそれ故に研究にとつて面白くないものにするものとしてではなく、むしろ、特殊な特色、すなわち、一種の態度——そう、われわれの世界が組織されている仕方にとつて多分中心的であるところの、普通であることについて仕事する態度——において明らかになる特殊な特色として扱うことなのである」(四一九頁)と。

(三) 拘禁されている人々について考えることは、われわれが日頃ほとんど意識せずに行っている、日々の生活世

界での活動を逆照射してくれる。シエルドン・メッシンジャー他は精神病院の入院患者について言う。(4) エンタテイナーのサミー・ディヴィス・ジュニアが言うことには、自分は一日の大部分は注目されている (being "on" 舞台上がっている、脚光を浴びている) が、家族・友人の間では自然体 (natural) であると。精神病院の入院患者の場合は、このように、注目されている場面と自然体である場面が明瞭には区別されず、しかも、この両者は深い所で両立しないのである。「合理的な人間の集団の構成員であることを奪われて、患者達は自分達の『性格(役柄)』を回復し、再び『正気の人間』になる仕事に取り組むことを強いられている。……このような条件の下においては、われわれは精神患者達が無条件で『注目されている』と予測できよう。彼らにとってその通りなのであって、誠に人生は劇場になるのである。……しかし、『注目されている』ことについての彼らの動機と彼らが置かれているプレッシャーを考えるならば、精神患者達が酷い不安と不快を経験することなしにはこの視点を維持できないことは多分、一層明らかである。」「注目されている」他の人々と同じように、精神患者達は自分の活動を潜在的なパフォーマンス、つまり、他人のためにある『性格(役柄)』を作り上げて維持する手段と見なすようになる。……しかしながら、『注目されている』他の人々と違って、精神患者達はジレンマに直面する。彼が自分自身で『舞台上がっている』として経験する『ショー』は、根本的な事柄、すなわち、彼が理解するところでは、『舞台にかけられる』べきではなく、その必要もない事柄に關している。つまり、彼の『正常性』に關しているのである。患者達は思慮分別あるパフォーマンスでこれを実現しようと努める。「一層重要なことに、『正常性』は、精神患者達が自分自身で再び当然そうだと思われることを深く望んでいるところの、自我の局面なのである。そして、自分の活動を『パフォーマンス』であると見なすことは、この決定的な目標と抵触するのである」。患者達はパフォーマンス

ンスに成功した時に、自分自身では自分の正常性が本当であるか否かについて益々確信が持てない。そこで、患者達はパフォーマンスを避ける場合もある。当局もまた、患者達が言ったりやったりすることをパフォーマンスであると見なす⁽⁵⁾。「われわれが理解するところでは、精神患者達は『正常な』ように見えることで満足せずに、『正常である』ことに努める。逆説的ではあるが、このことが一部で意味しているのは、自分自身に、『正常に見える』ことを望んでいることである。他人に対して、『正常に見える』ように努力すること——『正常性のショーを演ずる』こと——は、この目的と抵触する」。患者達は意識的に一種の台本 (script スクリプト) に従っているのであり、他人は潜在的観客であり、証人でもあり、場所は台本の場面であり、物事は小道具になる。患者達は自分自身と他人にとって自分の反応が正常な人間のそれであるように、すなわち、自発的なものと見えるようにモニターする。そこで、生ずるのは、単なる外見なのか、本当にそうなのか分からないという事態なのである。「もともと、このことは根本的な事柄に関して『注目されている』ことに伴う中核の問題であると思われる。すなわち、患者はもはや他人を信頼できないばかりでなく、酷く破壊的なことだが、自分自身をもはや信頼できなくなるのである」。

「自我から流れ出て、自我を反映している『自然の』現象である代わりに、精神患者達の性格(役柄)は患者にとつて『構成された客体』と思われるようになる、つまり、操作された活動と考案された場面、観客の評価と評価の基準、そして小道具の性質と利用可能性の生み出した『函数』と思われるようになるのである」。「精神患者達が参加した仕事は、彼ら自身の現実の位置付けと定着化であろう。この点で彼らは舞台俳優とは違っている。精神患者達⁽⁶⁾は免責されて『注目されていた』ままでいることはできない。そしてこの点において、精神患者達はわれわれ全てを代表しているのである」と。

(四) スタレー・コーエンとロリー・テイラーの調査した長期受刑者はゾンビやカチカチや植物にならないために、所内生活の全ての重要な局面を調べて、この新しい世界で自分のアイデンティティを維持するチャンス改善しなければならなかった。外の社会では当然と考えられている時間・仕事・友達・プライヴァシーなどが、所内生活では問題となる。まず、時間であるが、短期受刑者のように釈放が間近な場合は別として、特に長期受刑者では時間をカレンダーに従わせると、それは強迫観念となってしまうおそれが強い。そこで、季節の変化とか、手紙(信書)や面会(接見)の間合いなどによって時間が区切られる。また、仕事であるが、これは受刑者によって対応が異なるが、いずれにしても△距離を取る▽態度が顕著である。この態度は他の領域でも一般的である。たとえば、空想にふける場合にも、過度に及んで既に希薄になっている現実との接点が失われないように、不断に意識をチェックして、所内生活が耐え得るものとして維持できるように、常に心掛けねばならないのである。われわれ自身も「現実を操作する仕事 (reality work)」と「アイデンティティを扱う仕事 (identity work)」の両者を行わなければならないが、この点では受刑者もまた同様である。「刑務所の時間表や仕事スケジュールや報酬制度を無批判に受け入れることは、アイデンティティの可能な展開を脅かす。彼らは当局が差し出す「現実」に妥協することによって、自分達のユニークさを簡単に示すことができない。しかしながら、一度、彼らがあるタイプの代替する現実を構成するならば——施設の現実によつては相対的に汚染されていない、若干の小さな主観的スペースをきれいにするならば、その時にはそこでアイデンティティを扱う仕事が始められる場所を持つことになる。かれらは体制から切り離されているというそのスタイルそのものの中で、自分達の特別さを示すことができるのである」。(8)

利用できる資源は極めて乏しい。(8)

(五) 最後に、長年にわたって物語論を主張して来た心理学者セオドル・サービンの編著からさわりの部分を引用しよう。⁽⁹⁾ まずサービンである。機械論的世界観(心理学の分野では「刺激—反応」の動物実験に基づく行動主義が代表する)に代わって、文脈主義(Contextualism)が主張される。「文脈主義の根本比喩(Root metaphor)は歴史的行為であり、この比喩は物語論の記述に対応している。私が論じたように、物語論は人間の行動を検討し解釈するための実り多い比喩である」。「このエッセイの本体は物語を組織原則として扱っている。私はこの原則を因果性についての諸研究に言及して説明している。それらの研究とはランダムな非人間的な刺激という出来事がいかにして、おなじみの物語においてパフォーマンズを行う人間行為者として解釈されるかを示すものである。すなわち、物語原則は、日常生活におけるしばしば非体系的な出会い・相互行為に対して意味を用意するように働くのである」。「物語という根本比喩が、どうでも良いわけではない心理学上の問題を理解する場合に、どのように使われ得るかを説明するために、私は自己「欺瞞」現象を論じている。人間が自分の物語の作者であり、自分の物語の中の、演者であるという観察から、私は自己「欺瞞」者が自分達の物語的アイデンティティを維持または高めるためにどのように認識能力を使用するかを示している」と。

次に、もっと若い心理学者ロビンソンとホープは、結論として以下のように言う。「物語という考え——物語ること——は、認識・思考・記憶・行動を組織するうまい方法である。それは唯一のうまい方法ではないが、日常生活の人間間の経験という、その自然な領域の中では、いかなる他の方法よりも効果的である」。予測における使用と事実以後の使用を区別することが重要である。「……本物の出来事は統制された条件の下で再現することはできないから、物語は仮説のようにテストできない。しかしながら、人類は物語をテストする公式、非公式の双方の方

法を發展させて来た。法学を考えよ。すなわち、裁判は有責性を確立し、紛争を解決し、何らかの賠償を課す。このような様式で使われる手続は、物語の方法と科学的理論化のそれとの中間である。たとえば、裁判で使われる立証手続は、物語と理論の両方に似ている。一貫性と信頼性が要求されるが、交互的な吟味と立証もまた必要とされる。しかしながら、裁判上の検討の下にある出来事は繰り返すことはできない、すなわち、理論と仮説の検証で要求されるように再現できないから、判断はしばしば先例に基づく。それは本質的にはパターン・マッチングの手続である。類似性の判断は裁判においては、幾つかの制約が特定されているので、一層厳格であるが、それは物語のころにおいて使われているものと同じ手続である。同等の手続が、われわれが日常生活で出会う物語をチェックする場合には非公式に使われている。このようにして、どんな物語でも、その完全性・一貫性・納得性・適用可能性を評価する、受け入れられたやり方があるのである。絶対的証明に対して日常生活の事情が課す制限を考ええると、事実後の物語による認知は、合理的手続として完全な資格があるとわれわれは確信する」と。

以下、日々の生活世界における経験を論じている代表的な立場として、認知科学、アーヴィング・ゴフマン、アルフレッド・シュッツ、そしてエスノメソドロジーを順次、取り上げる。これらの立場を網羅的に検討したり、理論的に批判するためではない。われわれのテーマ——物語論——にとって適切な論点だけを取り上げる。

第一章 日々の生活世界における経験の構造——認知科学の立場から⁽¹⁰⁾

一 人間は現実をどのようにとらえるのか⁽¹¹⁾

(一) ガードナーは認知科学の基礎を置いた科学史の決定的瞬間として、一九四八年九月のアメリカのカリフォルニア工科大学でのヒクソン・シンポジウムをあげるが、当事者の間では一九五六年前後とされていると言⁽¹²⁾う。その年に出た、当時、革新的であったJ・S・プルナー他の『思考の研究』は言う。「過去数年間において、認知科学に対する関心とその研究の著しい増大が見られた。……これは古典的な『刺激』と『反応』の間を仲介している複雑な過程を認めるということから始まった。かつて、刺激—反応学習理論家たちは『心的』という臭いのするものはすべて避けて通ろうとする心理学を流行させようと望んだ。このような理論の、非のうちどころのない末梢主義は長くは続かなかった。……これらの間に介在する『認知地図』を詳しく見ることの方がよいことではないか⁽¹³⁾」。

認知心理学者ナイサーは認知の現実的な方向として、適切に四点を指摘している。①認知心理学は日常の環境内および自然の目的的な活動の文脈の中で起こっているものとして、認知を理解すべきである。②知覚し、思考する人々が現に住んでいる世界の細部、そして、その世界が人々に役立つような情報の微細な構造にもっと注意を払うべきである。③心理学は人々が実際に獲得することが可能な認知的技能の巧みさと複雑さ、このような技能が組織的に発達して行くという事実を認めるべきである。④認知心理学者は一層基本的な疑問——人間性の問題——に対する自分達の研究の意味を吟味すべきである⁽¹⁴⁾。

(二) 上に述べた認知科学、特に認知心理学の新しい展開は、行動主義に対する二〇世紀初頭のドイツのヴェルツ

ブルク学派、一九一〇年代以後のヴェルトハイマー、コフカ、ケーラー等のゲシュタルト心理学、三〇年代のイギリスのバートレットの心理学、スイスの発達心理学者ピアジェの研究などが用意した精神を承継したものであった。特に、われわれの論点にとってバートレットは重要である。本稿で参照した文献においても高く評価されており、しばしば引用されている。バートレットの、言うよりは認知心理学で最も有名な物語は「幽霊の戦い」である。バートレットは一九三二年の著書の中でこの物語を用いて第一次大戦前に英国人を被験者として行われた再生実験（直後から数年後まで）を報告している。⁽¹⁵⁾ この物語は約一世紀前のカナダのブリティッシュ・コロンビア州のクワキウトル・インディアン（複数形）（後述）には非常に良く適合する。まず、その物語の全文と二〇時間後の代表的な再生記録を掲げよう。

【幽霊の戦い】

ある夜二人の若者が、アザラシの猟をしにエギユラックから河へ向かった。そのうちに霧が立ちこめ、あたりは物音一つしなくなった。その時、突然戦いのおたけびが聞こえて来た。「たぶん軍隊が来たのだろう」と彼らは思った。彼らは岸に逃れ、丸太の背後に身をひそめた。その時、数艘のカヌーが現れ、櫂をこぐ音が聞こえた。一艘のカヌーが近づいて来た。カヌーには五人が乗っており、次のように言った。「おまえさんがたと一緒に連れて行くと思うのだから、どうだね、河をさかのぼって行って、奴らと一戦を交えるのだ」。「弓矢がないから」と若者の一人が言った。「弓矢ならカヌーの中にある」と彼らは答えた。「おれは行かない。殺されてしまうかもしれない。身内の者にはおれがどこに行つたのか分からなくなってしまう。だが、おまえは行っていい」と、もう一人の若者

に向かって言った。そこで若者の一人は戦いに出かけ、もう一人は家に帰った。戦士たちは河をのぼり、カラマの対岸の町についた。人々が水際におりて来て、戦いが始まった。そして多くの者が殺された。しかしやがてその若者は、戦士の一人がこう言うのを聞いた。「急いで帰ろう。あのインディアンがやられてしまった」。今や彼は、「なんと、こいつらは幽霊なのだ」と知った。彼の体に別状はなかった。それでも彼らは、彼がやられたと言った。そこでカヌーでエギュラックに引き返し、若者は岸に上がり家に帰り、火を焚いた。そして彼は皆を呼び、こう語った。「ほんとうにおれは幽霊と一緒に戦いに行ったのだ。仲間の多くは殺されたが、敵の多くも殺された。奴らはおれがやられたと言った。だが、おれは何ともなかったのだ」。彼はそこまで言うと、口をつぐんだ。太陽が昇ると、彼は地に倒れた。何か黒いものが口から出て来た。顔が歪んで来た。人々はとびあがって叫んだ。彼は死んでいた。

【再生記録例】

二人の男がエギュラックから魚釣りに出かけた。河で仕事をしていると、遠くに物音が聞こえた。「叫び声のようだ」と一人が言った。やがて、カヌーに乗った男たちが現れ、一行に加わって冒険に行かないかと誘った。若者の一人は家族の絆のために断ったが、もう一人は行きたいと言った。「でも弓矢がない」と彼は言った。「弓矢ならボートの中にある」と答えが返って来た。彼はすぐに乗り込み、彼の友人は家に帰った。一行は櫂でこいで河をのぼってカロマにつき、土手に上陸し始めた。敵が突進して来て、激しい戦いが続いた。やがて誰かが傷つき、敵は幽霊だという叫び声があがった。一行は河をくだり、若者はそんな経験をしたにもかかわらず、元気で家に帰った。次の日の明け方、彼は自分の冒険を努力して詳しく語った。彼が語っている最中に、黒いものが彼の口から噴出した。突然彼は叫び声を上げ、地に倒れた。彼の友達が彼の周りに集まった。しかし彼は死んでいた。

被験者達は物語の多くを省略し、事実を変え、新しい事実を加えている。パートレットは先鋭化・水準化・合理化として論じているが、要点は被験者達が自分自身の文化の典型に合わせて、物語を組織的に歪曲したことである。たとえば、「アザラシの獵」が「魚釣り」に、「カヌー」が「ボート」になっているし、そもそも誰が幽霊か間違えている。パートレットはカントによっていくぶん違った意味に使われ、イギリスの神経学者ヘッドによって当時の心理学に導入された「スキーマ(タ)」を使って説明する。「想起は無数の、固定した、生気のない、断片的な痕跡の再活性化ではない。それは、過去経験の能動的な総体に対するわれわれの態度に関連して行われる、想像的再構成、ないしは構成である。もつとも素朴な機械的反复の場合でさえ、想起が単に痕跡の再活性化であるということ(16)は現実にはありえないし、仮にあったとしてもそれは重要なことではない。その態度は、文字どおりの意味で、有機体が自己の『スキーマタ』を変化させる能力のことであり、直接的には意識の機能である」と。

(三) 図式(スキーマ)という用語はそもそも厳密な概念とは言えず、むしろ、これから存分に展開されるべきものと言えよう。また、認知心理学者それぞれによって位置付けが違うのである。たとえば、ナイサーは「図式→探索↓対象(利用可能情報)↓図式……」という知覚循環の中心に図式を据えているが、ルーメルハートは言語理解過程の中に、リンゼイ／ノーマンは社会的相互作用の中に、クラーク／クラークは文の理解・記憶の中に位置付ける、といった具合である。更には、このような状況に基づいて、後述する「フレーム」や「スクリプト」、あるいは「プロトタイプ」や「ステレオタイプ」という概念との異同と区別も人それぞれに異なっているものと思われる。「いずれにせよ、スキーマは人間の認知活動ひいては一般的日常活動の基礎であり、スキーマによって知覚や言語に関する理解が可能になり、種々の技能的行為も滑らかに遂行可能となり、さらには自然環境や人間社会に対する

適応も実現される、というほど、現代の認知心理学的人間観において考えられているスキーマの役割は大きい」。「同一文化の成員は同一経験を多く持つことによって、当然多くのスキーマを実質的に共有することになる。言語、文化、習慣、価値体系など多数の共有スキーマ抜きでは、コミュニケーションも相互理解も不可能である。その意味で、スキーマ研究の今後の発展は、社会心理学、社会学、文化人類学などにも次第に大きなかわりを持つてくることが予想される」と。⁽¹⁷⁾

(四) まず、単語や文よりも大きい文章の理解に関するスキーマの働きを指摘する研究を見てみよう。⁽¹⁸⁾ ブランスフォードとジョンソン (Bransford and Johnson, 1973) の有名な三つの実験の一つは、次の文章を、文脈を示して提示される場合と示さないで提示される場合とで再生の結果にどのような差が出るかを調べた。⁽¹⁹⁾

「手続きは全く簡単である。まず、物をいくつかの山に分ける。もちろん、全体量によつては、一山でもよい。設備がないためどこか他の場所に行かないといけないとしたら、それは次の段階であり、そうでなければ、あなたの準備はかなりよく整ったことになる。大事なのは一度にあまり多くやらないことである。つまり、一度に多くやりすぎるより、むしろ少なすぎる位の方がよい。この注意の必要性はすぐにはわからないが、もし守らないと簡単にやっかいなことになってしまうし、お金もかかることになってしまう。最初この作業はまったく複雑にみえるかも知れない。しかし、すぐにこれはまさに人生のもう一つの面となるであろう。近い将来にこの作業の必要性がなくなると思ふことは困難で、決して誰もそれについて予言することはできない。手続きがすべて完了すると、物をまたいくつかの山に分けて整理する。次にそれを決まった場所にしまう。作業の終わった物は再び使用され、そして再び同じサイクルがくり返される。やっかいなことだが、とにかくそれは人生の一部なのである」。

この文章を題なしで読まされた者よりも、「衣類の洗濯」に関する文章だと知らされた者は二倍も良く覚えることができたのである。この文章は衣類の洗濯に関するものであるという手掛りが全くないように、注意深く作られているのだが、そこが問題なのである。洗濯の経験・知識は全く役に立たない。文脈スキーマがないと、文章の意味が取れないのである。

ルーメルハートによれば、この問題は文章の中の句の指示対象が見いだせないことに原因がある。言語の目的はコミュニケーションであり、話し手は聞き手に伝達したいと思っている一連の概念を持っている。話し手はメッセージの中の新しい観念（新情報）を、聞き手が既に知っている関連概念（既知情報）と適切に関係づけられるように、文章を組み立てなければならない（「既知—新情報コントラクト」という）。その場合には、グライス（Grice, 1967）の「会話の公準（Conversational postulates）」に従わねばならない。グライスの公準は会話の目的を最大限發揮させるための「協力の原則」という基本原則から導出される。グライスは次のように言う。「量——(a)あなたの発言をできる限り情報の多いものにしないさい。(b)あなたの発言に必要以上の情報を含ませることを避けなさい。質——(a)間違いだと言っていることを話してはいけません。(b)確かな証拠のない事柄を話してはいけません。関係——(a)適切な発言をしなさい。方法——(a)あいまいな表現を避けなさい。(b)多様性を排しなさい。(c)簡潔を心がけなさい。(d)秩序正しく話さない。」

既知—新情報コントラクトはグライスの「金言」の方法の一部である。

ニ フレーム、スクリプト

フレーム⁽²⁰⁾⁽²¹⁾

(一) 部屋に入ると、一度に全部の情景が見えるような気がする。実際に細かく見るには時間がかかるのだが、無数の視覚的手がかりがあるのに、何故、そんなに速く、一貫して見えるようになるのだろうか。言語についても同様で、たとえば、アマガエルという言葉や聞くと、関連した情景が次々と浮かんで来る。たった五文字からどうしてこんなに複雑な情景が思い浮かべられるのか。それは「知覚的な経験一つひとつが、フレームと呼ぶ、これまでの経験の中で身につけてきたある構造を活性化する、という考え方である。誰でもが、何百万というフレームを記憶している。そして、そのフレームの一つひとつが、特定の種類の人に会うとか、部屋にいるとか、パーティに出席するとかいった、典型的な状況を表現しているのである」。「実際には、複雑になった部分、つまり付け加わった細かい部分は、記憶と推論によって得なければならないのである」(以上三九四—三九五頁)。「ナポレオンが言ったこと——もし本当に言ったならばの話だが——、つまり、何もかも心に思い描いてしまうような者は指揮官には不適任だということは、こうした欠陥のまず第一のものについて正しいことがわかる。これこれこういう状況ではこれこれこういう戦いがこうして起こるものと心に思い描きながら戦闘に臨む指揮官は、軍隊同士がぶつかって二分もたつと、何かが間違っていたことに気がつく。そして、思い描いていたことは使いものにならなくなってしまう。このとき指揮官にできるのは、別の場合を個別的に思い描くことだけであり、それとていつまでも役に立つわけではない。あるいはこういうこともかもしれない。指揮官が初めに予測していたことがうまくいかないとわかった場合、頭の中には雑多で差し迫ったことがたくさんあるので、実際には役立つようにそれを調節使用しても、前

と同じように困り果てるだけになってしまう。過去のことを参照するのに個性が強すぎるのは、そうした個性がまったくないのとはほとんど同じくらい厄介なことである。つねに変化する環境からの要求を適切に満たしていくには、そうした要求の一般的背景からいろいろなことがらを拾い出さなければならぬだけでなく、要求のうちのどの部分が、その一般的な意義や機能を妨げることなく流動し変化するかを知らなければならぬのである⁽²²⁾。このように、「フレームは過去の経験から引き出されるから、新しい状況に完全に合うことはほとんどない。したがって、個々の経験に対しては、自分の持っているフレームをどう適応させるか学習しなければならぬ」(三九七頁)。

(二)「フレームとは一種の骨組みのようなものである。たとえば、記入すべき空白がたくさんある何かの応募書類みたいなものを想像すればよい。フレームの場合、そういう空白をターミナルと呼ぶ。ターミナルは別の情報とそのフレームをつなぐ接続点として使われる」(三九六頁)。たとえば、 \wedge イス \vee という言葉を聞くと、 \wedge 典型적인イス \vee 、つまり、すわるどころとか、背もたれとか、脚など細かいところまでが仮定される。これは視覚の場合も同様である。すなわち、「暗黙の仮定は、フレームの空白部分を埋めることによって、典型的なものごとを表現する」。「暗黙の割当てには非常に大きな意義がある。なぜなら、それは以前の経験を表現するのに役立つからである。暗黙の割当てを用いて私たちは、次に起こることを推論したり、一般化したり、予測したりすることができる。また、期待していたことが実際とは合わなかったときに何をすべきかも、知ることができる。私たちが持っているいろいろなフレームは、考えること、行うことのすべてに影響をあたえるのである」(三九六—三九七頁)。「いいかえると私たちは、記憶のはたらくで特定のものごとを典型的なものごとに置きかえることによって、……推論を行う」(四〇一頁)。「常識というのは単純なものではない。逆に常識は、苦しみの末に身についた、たくさんの実用

的な考えからなる巨大な社会である。つまりこの社会は、部分的には法則とか規則性のような何かの原理に基づいてはいるが、大部分は、生涯を通じて学習されるルールや例外、性格的な特徴や傾向、平衡感覚、そして自己調節感覚などが折り重なったものである」(一四頁)。「いずれにしても、ちゃんと推論ができるためには、記憶をコントロールするエージェンシーたちが、記憶を、あたかも積み木であるかのように△動かして▽まわれるように、学習しておく必要がある。……しかし残念ながら、このような学習プロセスがどう働くかについては、ほとんど何も知られていない。実際私たちは、そういうプロセスが存在していることさえ、気づいていないといってもよい。気づかないのは、こういった△常識▽による推論や仮定が、心の中で意識的に努力したり活動したりせずに、心の中に生まれてくるからである。一方、右のような技能のはたらきに利用される短期記憶は、この技能のはたらきに用いるエージェンツたちの最近の活動を記憶するための短期記憶とまったく同じものであり、この短期記憶自体、きわめて高速にはたらくことに注意しよう。常識による推論や仮定が無意識のうちになされるのは、おそらくこのような速さの結果なのである」(四〇一—四〇二頁)。

(三) ここで△記憶の理論▽として「K—ライン(知識ライン)」について述べよう。「何か良い考えが浮かんだり、問題を解決したり、あるいは忘れた経験をしたりと、必ず、それを△表現する▽ためのK—ラインが活性化される。問題を解決したり、良い考えが浮かんだりするときに活性化されるどのエージェンツたちにも接続されるような、線でつながった構造が、K—ラインである」。「後になって、そのK—ラインを活性化させると、そのK—ラインに接続していたエージェンツたちが活性化され、心の△状態▽が、前に問題を解決したときや良い考えが浮かんだときと同じような△状態▽になる。これによって、新しいが似たような問題は比較的楽に解けるようにな

る」。Kーラインはどのようにしたらくのだろうか。ケネス・ハースによると「自転車を修理したいでしょう。修理を始める前に、両手に赤いペンキを塗りつけておく。すると、修理に使うすべての道具に赤いマークがつくことになる。修理が終わったら、赤い色は△自転車修理に使う▽ということだけを覚えておく。すると、次に自転車を修理するときは、赤いマーク付きの道具を全部、前もって取り出しておくことで、時間の節約ができる」。「もし、違った仕事に対しては違う色を使うなら、道具によっては幾つかの色でマークが付けられることになる。つまり、それぞれのエージェントをたくさん違ったKーラインに接続することができ。後で、やらなくてはならない仕事が出てきたら、その仕事に合ったKーラインを活性化することで、前に似たような仕事に使われた道具がみんな自動的に手に入る」(一一二—一一三頁)。Kーラインの仕事をするには、色を塗るよりもっと効果的な方法が必要となろう。

「ここでは、どんなフレームも、なんらかの認識エージェントの集まりによって活性化される、と仮定することにしよう。ここで、認識エージェントとは、ある意味でKーラインとは逆のタイプのエージェントである。というのは、認識エージェントは、心のある状態を活性化するのではなく、心のある状態が生じたことを認識しなければならないからである。したがって、フレームの認識エージェントは、ターミナルへの接続が逆になっている点を除けば、フレームのターミナルにきわめてよく似ているのである」。「右に述べたことから、フレームだけでなく、一般にどんなエージェンシーも、認識エージェントたちと記憶エージェントたちとの間に別のエージェントたちがはさまれた格好になっていると考えられる」。「実際には、エージェント一つひとつが——フレーム、Kーライン、その他どんなエージェントにしても——いつ活性化されればよいかを学習するための、なんらかのメカニズムを持つ

ていなければならない。そのためには、単にいくつかの特定の特徴があると認識するだけではなく、それ以上のことが必要である。たとえば、対象を自動車として認識するには、車体やタイヤやナンバープレートのような部分品を並べただけでは不十分であり、フレームは、こうした部分品が適切な関係にあることも認識しなくてはならない」(四〇七頁)。「世界とつねに接触しているというわたしたちの感覚は、純粹経験ではない。それは、一種の内在性の錯覚である。私たちが現実性の感覚をもつのは、視覚系に問いかけるとその答えがみなきわめて速く得られてしまい、その結果答えが初めからあったかのように思えるからである。そして、フレームアレイ「同じターミナルを共有するフレームの集まり」がこれを可能にしている。つまり、フレームアレイにはいろいろなフレームが含まれているが、そのどれかのフレームのターミナルが埋められると、その他のフレームのターミナルもまた埋められる。そして、対象を見る方向が変わるたびに、すでにターミナルの埋められた——暗黙の仮定によって埋められてもよい——フレームが使われる。こうして、対象が直ちに見えるように思えるのである」(四一五—四一六頁)。「どんな不規則な形であっても、いろいろな点や線の間の距離や方角や対称性について、完全な考えを持ちたいと思う人なら、対象自体が目の前になくてもその考えを心に思うかべるコツが、だんだんと身についてくる。そして、そういうコツが身につけば、空想に基づいて発明したり絵に描いたりする人たちにとって、また現実の生活に基づいて絵を描く人たちがもつと正確に描けるように、ありとあらゆることに役立つようになる」(四一七—四一八頁)。「フレームの働きについては、まだまだ多くの疑問が残っている。たとえば、いろいろなフレームを並列的に用いて、いろいろ違ったものを一度に認識することができなければならない。しかし、どのようにして私たちは、一度に、群衆の中のたくさんの顔を見たり、壁にはめ込まれたたくさんのレンガを見たり、部屋の中にたくさんのイスを見

たりすることができののだろうか」(四二〇頁)。今のところ、分かっていないのである。

スクリプト (Script)⁽²³⁾

(一) スクリプトとは出来事や活動のスキーマ・フレームである。「スクリプトはわれわれのルーティーンと役割に意味と意義を用意し、われわれがある特定の時点でのように行動し感じるべきかをわれわれに語り、われわれが状況で出会う他人についての細部を提供し、ゲームの次の動き、プレーの次の展開を予測する」。「ところで、われわれの日常生活の多くの部分にとつては、状況は脚本化されていないように思われる。……しかしながら、われわれが『計画』『鍵となる領域』『我々が生活している所』『生活計画』——家庭・性・仕事・レジャー・政治の領域——と考えている生活・人生の領域で他人と接触するやいなや、われわれはミニチュア・ドラマに益々かわるようになってしまう。そこでは定義づけること、名付けること、筋をつくることが重んじられているのである」。「若干のケースでは、これらのドラマは日々の生活の中ではほとんど目に見えない。それらは自然の処理のように見える」。「時にはそれらは単なるエピソードか儀式以上の何ものでもないかもしれない。……しかし、それぞれの場合に行動の単なる記述以上のことを要求する多くの要因をわれわれは見い出すだろう」。たとえば、「家族の食事のスキリプトによる記述は、出席する登場人物、食べられる食べ物、話される言葉をリスト・アップすることを優に越えている。それは家族の食事とはどのようなものであるべきかという観念を引き合いに出す。それは出席者全員によって分節化はされなくとも感じられた観念であり、同時にそれは人々が演じられた役割、表明された感情、そしてそれらが編成されたやり方を理解することを許す観念なのである」。「われわれが登場する多様なドラマにおける

われわれの筋を学習する時、筋の展開の中のある特定の状況、ある一定の時点においてわれわれはどのように感じるべきかを正確に学ばなければならない。われわれは簡単に新しい経験ができないが、もし新しい経験をする場合には、「これらの経験が要求するのは、車の運転を学ぶように学ぶことができる、単に技術の新しい組み合わせではなく、同様に、違ったドラマの登場人物としてのわれわれ自身の新しい感じ方、この新しいドラマの筋のありのままの評価、出来事の順序に沿った段階に基づいて内的状態を「ハイ」とか「エクシタシイ」とか「セクシイ」と名付ける能力、これらすべての事柄をそこに居る他人の感情・意義と調和させて編成する能力、その経験を確認できる成功結果へともたらす能力なのである」。「薬物を用いる、恋に落ちる、子供達の世話をする、田舎で数日過ごす、夜に町に出る、神秘的である一定のやり方があり、それらは大衆文化の中に組み込まれている。これらが仕事・レジャー・ロマンス・家庭その他のスクリプト全てが注意を傾注しなければならないマスター・スクリプトを構成している。われわれは必ずこれらマスター・スクリプトに従わねばならないと言うのではない。われわれが述べているのは、これらのスクリプトを意識するようになるわれわれの潜在的能力、つまり、これらのスクリプトがわれわれの社会において一般的に活用可能であるが故に存在している潜在的能力のことなのである」⁽²⁴⁾。

(二) スクリプト概念はロジャー・シャンクとロバート・エイベルソンによって展開されたが、いろいろなタイプがある。たとえば、図書館で本を検索するスクリプトでは、「図書館に入る↓目録・パソコンで本を探す↓受付でその本を頼む(開架式であれば、その本の部門へ行く↓棚を探す)↓本を受け取って閲覧室のテーブルの所に行く↓本を読む↓本を返す↓図書館を出る」と事象が経過しよう。図書館に行く目的はその他、特定の事実を確かめること、最近の雑誌を調べることなどいろいろであろう。目的が異なればスクリプトの細部は違ったものになろう。

いずれにしても、図書館スクリプトは基本的にはデータ駆動型であり、△状況駆動スクリプト▽である。もつとずつと個人的に制御される△個人駆動スクリプト▽もある。たとえば、両親との関係などの個人的な相互作用のためのスクリプトである。この場合には、個人的にだけではなく、文化的にも駆動されていると言える（リンゼイ／ノーマン）。

もつとも有名なスクリプトはシャンク／エーベルソンの△レストラン・スクリプト▽である。まず、どんな食事のレストランかが問題である。食べたい食事を決める。次に、場所や日時などによって利用できるレストランが限定されよう。支払い様式も考えねばならない（パール／ファイゲンバウム）。これらを決めた後で、いよいよレストランに行く（アンダーソン、パール／ファイゲンバウム、ルーメルハート、戸田他）。

【スクリプト名：レストラン】

道具類：テーブル、メニュー、調理された食物、請求書、お金

配 役：客、ウェイター（ウェイトレス）、料理人、勘定係、支配人（主人）

登場条件：客は空腹である。客はお金を持っている。

結 果：客の所持金が減る。主人の所持金が増える。客は空腹でなくなる。

第一場：入店

客はレストランに入る↓客はテーブルを見渡す↓客はどこに座るかを決める（ウェイターが客を案内する）

↓客はテーブルへ行く↓客は着席する

第二場：注文

客はメニューを取り上げる(客はメニューを要求する)↓客はメニューを見る↓客は注文する料理を決める↓客はウェイターに合図する↓ウェイターがテーブルの所に来る↓客は料理を注文する↓ウェイターは料理人の所に行く↓ウェイターは料理人に注文を伝える↓料理人は料理を作る

第三場…食事

料理人はウェイターに料理を渡す↓ウェイターは料理を客に運ぶ↓客は料理を食べる

第四場…退出

ウェイターは請求書を書く↓ウェイターは客の所に行く↓ウェイターは客に請求書を渡す↓客は勘定係の所に行く↓客は勘定係にお金を渡す(クレジット・カードを渡す)↓客はレストランを出る

それぞれの場面や場面の各行為系列のいろいろなヴァリエーションが考えられるが、それは臨機応変にスクリプトを修正して対応すれば良い。しかし、レストラン・スクリプトでは△レストラン▽というヘッダー(script header)と食事を食べるというゴール(goal・目標)ないし主概念が重要である。レストランに入っても食事をそっちのけにして議論する場合には、レストラン・スクリプトでは対応できないし、「レストランの前で猫が死んでいた」のであれば、そもそも全く話は別である。スクリプトにはこの他にチャールニアクのパーティ・スクリプトやスーパーマーケット・スクリプト、医者スクリプトなどが知られている。エーベルソンは更に、イデオロギーを扱うスクリプトのように、もっと複雑な問題を研究している(ボーデンⅠ四章、Ⅱ一章)。

スクリプトの一部を省いたり、順序をかえたりして再生実験をすると、実際に聞いた物語の項目の記憶が若干残

っているために、実際の物語のままに再生する傾向があったが、記憶そのものが典型的なスクリプトの方に變形する傾向が見られた (Mandler)。スクリプトは、それだけ強力にわれわれの経験を組織化するものである。

(三) 人はいつも決まりきった状況・場面ばかりに出会うわけではないから、当然、もつと非日常的で變化に富んだ状況・場面を扱うことができるフレームが必要である。そこでシャンク／エーベルソンが考えたのが、スクリプトよりも一層一般性の高い知識構造の「プラン (Plan)」である。プランはゴール (目標) に到達するために使用できる行為の集合 (プラン・ボックス) を表現したフレームであり、スクリプトのように一連の状況・行為が固定的に構造化されていない。もつとも、スクリプトも本来はプランにその源を持つといえよう (戸田他。パール／フアイゲンバウム)。

第二章 アーヴィング・ゴフマンの分析に見る日々の生活世界の経験

一 ゴフマンとはどんな社会学者なのか

(一) ゴフマンほど、いろいろと言われる社会学者は珍しい。それ程に人口に膾炙した存在であったのであるが、たとえば、逸脱したシンボリック・インタラクショニスト、当代のデュルケイミアン、構造主義者、ポスト・モダンの前衛知識人、記号論者など⁽¹⁾。ここではゴフマンを高く評価するアンソニー・ギデンズに従ってまとめよう。まず、第一に、「ゴフマンの仕事は、社会生活の些細な諸特徴についての一連の特異な観察以上のものではなく、それらの観察は全体的な知的統一性を持っていない」と主張される⁽²⁾。しかし、これは全くの誤解であり、ゴフマン

の「関心は長年にわたり、このフェース・トゥ・フェース (face-to-face) の分野を分析的に実行可能な分野——すなわち、何か適当な名前がないので、相互行為秩序 (interaction order) と名付けられる分野——として、研究の選好される方法がミクロ分析である分野として受け入れられることを促進することであつた」⁽³⁾と。第二に、ゴフマンの分析は白人の中産階級のアメリカの、競争的で個人主義的な文化に住む人々の自己追及活動という極めて限られた環境だけに適用されると主張される。この主張はゴフマン自身の留保に基づくが、しかし、⁽⁴⁾「ゴフマンはこれと違つて彼が信ずるところによれば、彼が述べる活動形態と社会的メカニズムは極めて広い一般性を持つていることをしばしば明らかにしてさえているのである。特定の社会の内部でだけ適用されるどころではなく、多くはあらゆる時代と場所における社会的相互行為に対して現実に重要性を持つてあろう」と。第三に、この点と関連して、ゴフマンの描く行為者は「虚偽の、あるいは操作的なやり方で他者に対して自己を提示することによって自分自身の虚栄に迎合することに関心を持つ、単なる『演技者』に過ぎないと考えられている。……ゴフマンの仕事は明白に、外見が全てであり、自己を追及する個人が優位を占める文化の描写——疑いもなくその歪曲された描写であると考へられている」と。この点で、アルビン・グールドナーやバーガー／ルックマンは誤つて⁽⁵⁾いる。ゴフマンにとって「信頼と気転こそが、外見のシニカルな操作よりも、社会的相互行為の明らかに一層基本的で、拘束的な特徴なのである」と。最後に、ゴフマンは民族誌、文化人類学の著作だとしばしば誤解される。確かに、ゴフマンは計量的な方法を用いず、参与観察に基づく小規模の質的研究であるから、このような誤解も一理ある。⁽⁶⁾しかし、ゴフマンの関心は「慣れ親しんだものの中に慣れ親しんでいないものを明らかにし、われわれの日々の活動において最も普通で、習慣的なものから知的に疎遠なものを生み出そう」とするところにあると。

(二) ゴフマンは言う。「この本は経験の組織——個々の行為者が自分の心に取り入れることができる何物か——に関するものであり、社会の組織に関するものではない。私は社会学の中核的な事柄である——社会組織と社会構造——について語っているとは少しも要求しない。……私は社会生活の構造を書いているのではなく、個人が自分の社会生活の何らかの瞬間に持つ経験の構造について書いているのである。私は個人的には社会がいかなる仕方でも第一であり、いかなる個人の現在の間与も第二であると思う。だが、この報告は第二の事柄だけを扱っている」。

「ここで展開されている分析は有利な立場の階級と不利な立場のその違いを捉えていず、そのような事柄から注意を逸らすと言ひ得るだろう。私はそのように言うことは正しいと思う。しかし、私がただ示唆できることは、虚偽意識と戦い、人々を真の利害に目覚めさせようとする人がするべきことは沢山あるということである。何故なら、眠りはあまりに深いからである。そして私はここで子守唄を歌おうというのではない。ただ、そつと忍び込んで人々が軒をかく様子を観察しようというのだ」と。⁽⁷⁾

ベネット・バーガーは、このようなゴフマンの文章はリベラルな、そしてラジカルな同僚の批判を鈍らせる動きであると言うが、ギデンズは更に積極的にゴフマンの立場を次のように擁護する。⁽⁸⁾

①ゴフマンは全制施設 (total institution) についての研究以外では主流社会学・心理学のテーマを意図的に拒否したが、それは彼がそうしなければ自分の研究テーマである相互行為秩序は研究できないと考えたからであった。この判断は正しい。②ゴフマンは「共在 (Co-presence)」の理論家として、フェース・テウ・フェースの相互行為がその共在の状況に左右されることを認識していたが、極端な状況主義を拒否する。何故ならば、大抵の社会的行為の場面は特定の共在の時間と空間を越えて広がっており、しかも個々人は自分の個人史とパーソナリティと、他

者と共有する知識形態を状況に持ち込むからである。③ゴフマンは社会的現実とは儀式形態を取った道徳的現実であると考え、その「方法的個人主義」を拒否する。ゴフマンの共在状況における個人の行動は一層全般的な社会関係や社会形態の存在と同様に現実的なものであるが、それはしばしばゴフマン自身が述べて誤解を招いているように、ミクロ社会学ではない。ゴフマンは「小集団」を研究対象としていないのである。④ゴフマンは自分で認めているよりも、制度の再生産、マクロ構造的な事柄の理解に貢献している。「社会制度は社会的活動の繰り返しを通じて形成され、再形成される。共在の状況において、行為者たちの日々の生活の一見すると最も些細な局面においてさえも、行為者たちによって採用される行動の技術・戦略・様式は、時間と空間を越えた制度の継続性にとって基本的なのである」。ギデンスはこのような例として言語、信頼と金銭を取り上げる。⑤ギデンスはゴフマンには制度の分析と動機分析が欠けているために、分析が平板であるが、これを補うことができることを指摘する。更に社会変動の問題も日々の生活の実践の変革を通じて行われるのであるから、ゴフマンの分析はその意味で視角は異なるが、プロローグのそれと似たところがあり、ゴフマンの鍵となるアイデアを導入して一層包括的なアプローチが可能であると言う。

ギデンスはゴフマンを繰り返し「共在」の理論家だと強調しているが、「共在」の理論をまとめて展開はしていない。⁽⁹⁾この点で最もまともなのは安川一・椎野信雄・宮内正である。⁽¹⁰⁾以下では、ゴフマンの分析を整理したい。

二 「共在」における経験の構造 A 第一次フレームワーク (Primary Framework) ⁽¹¹⁾

(一) ゴフマンのフレームもしくは第一次フレームワーク (frame or primary framework) とは、それ自体は意味を持たない出来事や場面の局面の意味のあるものとして経験させる、経験の組織化の原理である (FA: 10-1, 21)。第一次というのは、フレームワークの適用がそれを適用する人によって、事前の、あるいはオリジナルな解釈に依存したり、立ち戻ったりしていいと考えられることを言う。フレーム分析とは経験の組織化を検討することである。経験するとは、このようにフレームを適用していること (「フレームリング (framing)」) なのであるが、このときにフレームそのものは意識化されない。フレームリングは「フレームリング慣行」 (framing convention) (FA: 175) の運用によって行われるのだが、この事実そのものは活動のスムーズな流れの中に埋もれてしまう。それが経験がリアルだということなのである。経験しているということが経験されずにいる場合にのみ、その経験はリアルなのである。それぞれの第一次フレームワークは、組織化の程度が異なっているが、「その利用者に、この用語で定義された一見すると無数の具体的な出来事を位置付け、認識し、同定し、ラベルづけることを許すのである。利用者はフレームワークを持つ、そのように組織されている諸特徴を意識していいように思われるし、尋ねられてもフレームワークを完全には述べられないが、しかし、このハンディキャップはフレームワークを利用者が容易かつ完全に適用する妨げにはならない」 (FA: 21)。

(二) われわれは日々の生活において、二種類の第一次フレームワーク、すなわち、「自然的フレームワーク」と「社会的フレームワーク」がかなり明確に区別されていることを感じている。自然的フレームワークは出来事を方向性を持たない、志向性を持たない、生命を持たない、無誘導の「純粋に物理的な」ものとして同定する。それは初め

から終わりまで、「自然の」決定因子に委ねられており、意図や成功・失敗やサンクションとは無関係である。それはエネルギー保存の法則やただ一つの不可逆的な時間といった特性を共有する。これら自然的フレームワークのエレガントな例は物理学と生物学に見られる。報告の中で与えられた天候の状態など。

社会的フレームワークはこれに対して、意思・目的、そして、知性、生命あるエイジェンシー——主要なものは人間である——の制御の努力を体现する出来事の背後理解を提供する。エイジェンシーが行うことは、「誘導された行動(guided doings)」と呼び得る。これらの行動は行為者を「基準」、すなわち、その正直さ・効率性・経済性・安全性・エレガントさ・巧みさ・趣味の良さ等々に基づく彼の行為の社会的評価に委ねる。結果性の連続した管理が維持され、行動が不意に妨害されたり、そらされたりした時や、特別の補償の努力が必要な時には、継続的な補正制御が最も明らかになる。動機と意図が伴っているが、それらの帰趨は理解についての多様な社会的フレームワークの内、どれが適用されるべきかの選択を助ける。ニュースによる天候の報告など。「因果性」という言葉は自然の盲目の効果に関しては無限に広がる原因と結果の鎖として、人間の意図された効果に関しては心の決定に始まる何物かと見なされる。

誘導された行動は二つの種類の理解を許す。第一は、自然の出来事が課す特別の制約と一致して、自然の世界を有効に操作することに、第二は、行為者が関与する特別の世界に關している。全ての社会的フレームワークはルールを伴っている。誘導された行動は自然の秩序に介入することなしには、有効に達成できない。社会的に誘導された行動は、したがって、自然のスキーマの内部で一部分は分析可能である。われわれは出来事を第一次フレームワークによって認識し、我々が採用したフレームワークのタイプがそれが適用される出来事の記述の仕方を用意する。

検死官が死の原因を尋ねる場合には、彼は生理学という自然スキーマの用語での答えを求めている。検死官が死の態様を尋ねる場合には、彼が求めているのはドラマチックに社会的な解答であり、意図の可能な部分を述べるものなのである。

幾つかのフレームワークが関与しているかもしれないし、何物も関与していないかもしれない。しかし、ここは「日々の生活世界」であり、シュッツの言う「広く覚醒した実践的現実の世界」なのであり、作動しているフィクション、つまり、日々の生活の行動はそれらの行動を誘導する若干のフレームワーク（ないし幾つかのフレームワーク）の故に理解できること、そして、このようなスキーマに到達することは些細な仕事ではなく、不可能な仕事でもないというフィクションを少なくとも一時的に推し進めることが受け入れられる。「何がここで起こっているのか」が問題なのだが、個人が自分の利害に基づいて、何が起こっているかを決める時にフレームワークを想定する。勿論、失敗するかも知れないのだが、多くの場合われわれの社会では個人は特定のフレームワークの活用において有能であると信じられているのである。「個人が活動を読み取ろうとする際には諸要素・過程が想定されるが、しばしばそれらは、その活動自体が実際に証明になるようになっていく。そして何故、そうなっており、そうないのではないかと」と言うと、社会生活はしばしば個人が理解でき、処理できる何物かとして組織されているのである。認識を誘導しうるけれども誘導しない多くの有効な組織化原理がありうるという事実にもかかわらず、認識と認識されるものの間に一致ないし同形が要請されている。そして、他人がこのことを有効な要求であると考えるのと全く同様に、私もそうするのである」と（FA: 26）。

(三) 特定の社会集団の第一次フレームワークは、その文化の中心要素であり、特に理解がスキーマの主要なクラ

ス、これらのクラスの相互関係、そして、これらの解釈モデルが世界において解放する諸力・エージェントの総合力に関する場合には、そうである。ある集団のフレイムワークのフレイムワークのイメージ、つまり、その信念体系、その「コスモロジー」を構成することを試みねばならない——もつともそれは現代の社会生活を詳細に検討する者が通常は他の人に喜んで委ねたいと思っている分野であるけれども (F.A. 27-28)。

(四) 第一次フレイムワークの概念は不十分なものはあるが、五つの事柄を考察して、世界の働きに関するわれわれの全般的な理解に資したい (F.A. 28-37)。

① 「肝を潰す複合現象 (astounding complex)」

UFOのように合理的に説明がつかない出来事。われわれの社会では全ての出来事が——例外なしに——コンヴェンショナルな信念体系に収まり、管理され得ると言う、極めて有意義な想定が一般になされている。説明されないことは我慢できるが、説明できないことには我慢できない。

② 「コスモロジーの関心」

スタント・マンのように、ほとんど不可能な条件の下で、統制を維持する行為や、高度に訓練された動物の行為など。①②はサーカスに密接に関連しているが、サーカスや水族館の社会的機能は、われわれの基本的フレイムワークの秩序と限界が何であるかを示すことにある。素人の日々の生活においてコスモロジーの関心がいかに高いかが分かる。

③ 「やり損ない (mufings)」

行為を誘導する統制の明瞭な場所が想定されている。ある行為は四肢だけで (靴紐を結ぶ)、別の行為は四

肢の拡張であり（車の運転）、ある行為は四肢の統制で始まるが、最初の統制を離れた所で終わる（ゴルフ・ボールを飛ばす）。初期の社会化が第一の能力を保障し、大人になってからの社会化——特に職業の訓練——がその他の能力を保障する。この学習過程の結果の一つは、世界を社会的フレームワークで支配され、理解されるものに変えることである。都会の社会においては大人は自分の身体の統制を失うことなく、衝突に氣をつけることもなく、動き回っている——自然世界全体が公共的・私的統制手段に服しているように。地震の場合に、コップを落とすことは、個人の責任ではない。ローレル・ハーディ・タイプのコメディが喜ばれることも逆に、このことを示している。⁽¹²⁾

④ 「偶然性 (fortuitousness)」

偶然、事故、不幸、幸運など。個人は適切に自分の行動を誘導したが、予期できない仕方、重大な結果を伴った世界の自然の働きに遭遇する。二人以上の個人が、関わる場合もある。責任が帰せられないので、自然力が作用したのは社会的に誘導された行為であるが、自然的フレームワークのようになる。⁽³⁾と④と言う文化的概念は、このようにして、そうでなければ分析体系にとって当惑となる出来事と市民がうまくやって行けるようにするのである。

⑤ 「緊張と冗談の問題」⁽¹³⁾

医療現場の人々が裸の身体を扱う場面のフレームワークは、社会的なそれから、自然的なそれに変わった。今日でも、性的な読み込みをチェックする用語と行為の手続が慎重に取られる。われわれの解釈能力はわれわれの動きのそれぞれ（タクシーを止めるための手の動きと、友達への挨拶のそれ）を区別する。「この識別はそれはそれで、

それぞれの種類の出来事は出来事の全イデオムの一つの要素に過ぎず、それぞれのイデオムは別々のフレームワークの一部なのである。そして、この場合に西欧社会について当たっていることは、多分、全ての他の社会についても同様に、当たっている」と。

三 「共在」における経験の構造 B キーとキーイング (Keys and Keyings) (FA: 40-82)

(一) もともと關いの行動を遊び行為として採用すると、遊びとしての定義が世界の通常の意味を完全に抑える。そこでフレーム分析の中心概念の一つである「キー」、すなわち、「ある特定の行動、何らかの第一次フレームワークによって既に意味を持つ行動が、この活動の上にパターン化されているけれども、関与者によって全く違った何物かに変換されること」が理解される。書き換えの過程は「キーイング」と呼ばれる。音楽のアナロジーが想定されている。

(二) キーイングの完全な定義は以下になるう。

- ① 体系的な変換が、それなしにはキーイングが無意味になるある解釈スキーマと一致して、既に有意味な材料に關して起こる。
- ② その活動の関与者は体系的な変換が行われていること、それは彼らにとって行われていることを根本的に再構成するものであることを知っているのであり、公然と認めるのである。
- ③ 変換が何時始まったか、そして何時終わるかを明確にするためのキュー、つまり、変換がその期間内で、その時までには制限される時間の括りが使われる。同様に、キーイングがその空間の括りの中ではどこでも適用され、そ

の外では適用されないことを指示する、空間的括りが普通ある。

④ キーイングは、何か特定のクラスのパースペクティヴの中で認識される出来事に限定されない。大工仕事のようなく道具的に志向した活動で遊ぶことができるのと全く同様に、結婚式のセレモニーで遊ぶこともできる。確かに、自然的スキーマの中で認識された出来事は、社会的スキーマで認識されたもの程にはキーイングされにくいようであるが。

⑤ 特定のキーイングが導入した体系的な変換は、そのようにして変換した活動を少しだけ変えるのだが、しかしそれは今行われていると関与者が言うことを完全に変えるのである。この場合にたとえば喧嘩が行われているように見えるが、しかし初めから、関与者が言うように、本当に行われている唯一の事柄は遊びなのである。そこではキーイングが確かに一つあるが、それがわれわれが本当に行われていると考えることを決定する決定的役割を遂行しているのである。

(三) 「何がここで起きているのか」と言う問いに対して「それは遊びです」と答えることには、単なる焦点の変更に上のことが伴っている。それはこれらの解答は内向きの経験的目的論なのであり、関与者が可能と感じている限り、その活動によって支えられる意味な——「王国」と呼び得る——宇宙に入ることになる。

キーイングが伴わない場合には、第一次フレームワークだけが適用される。「それは本当に闘いなのです」と。変換されない活動が起こっている場合には、フレームによる定義は疎外であり、皮肉であり、距離である。全てのキーイングされない活動が真剣なわけではなく、全ての交換されていない活動が真剣なわけではない。

完全に第一次フレームワークでフレームされている行動は、リアルであり、実際に、または文字どおり起きている

ると言える。これらの行動のキーイングは、文字どおり・リアルに・実際に起きていない何物かを提供する。しかし、それにもかかわらず、これらの行動をステージに上げることは現実には、実際に起きていないと言い得る。相互の挨拶は健康についての質問を伴うが、文字どおりの情報の要求とは考えられていない。しかし、確かに本当の挨拶が行われたのである。「リアル」「実際」「文字どおり」と言う用語は、問題の活動が、そのような行為にとって普通で典型的であると感じられる以上の変換は伴っていないことを意味するに過ぎない。

(四) 以下、われわれの社会で使われる基本的なキーイングを五つの項目で検討しよう。その際に、犯罪映画が実際の犯罪者に言葉とスタイルを提供するように、オリジナルとコピーを区別しない。

① 「faking」 (make-believe)

あまり変換されていない活動の真似や稽古として扱われる活動で、実際的なものは何も生じない。そうすることが提供する直接の満足感や切迫するニーズから逃れるためにやる。活動の劇的な会話が必要で、そうでないと企てそのものが平板になり、不安定化する。

(a) ごっこを中心的なものは「遊び (playfulness)」である。たとえば、ボクサーが計量の後でカメラの前で殴る真似をするなど、われわれの社会の随所、随時に見られる。しかし、限界がある。たとえば、趣味の問題もあるし、飛行機の上で「爆弾を持っている」は冗談とは取られない。限界は時代と場所によっても変化する。

(b) ごっこの一つは「ファンタジーまたは白昼夢」である。これは診療行為のような場合を除いては、行為の中に現れないし、語られもしない。それは普通は私的な事柄だとされているが、診療行為や投影テストでは診断がなされることがある。その場合でもキーイングには柔軟性がある。

(c) 「ドラマのスク립ト」は特にTVやラジオ、新聞、雑誌、本、ライブ・ステージなどのメディアを通じて公衆に提供されている。これらの深い意味は、それらが日々の生活の実物大のモデル、スク립ト化されていない社会的活動の総合的なスク립トを提供しており、そのようにして、この領域の構造に関する広いヒントの源泉であることにある。フレーミングの限界も良く説明できる。現代社会におけるスク립トの限界の一つは性である。要約すれば、問題はフレイムスの限界、つまり、何が実際の出来事からそれについてのスク립トに変換を許容されるかに関する限界なのである。自我を体现している身体は、その生物学的機能と折り合いをつけなければならないが、この折り合いはこれらの機能が「文脈に」おいて見られること、すなわち、ここでは注意の焦点ではなく、人間の社会的経験にとって付随的なものを意味していると保証されることで達成されるのである。人々が食事や性行為をするには物語が必要であるが、それらは孤立した表示、あるいは関心事として独自に細かく検討されるものとしてではなく、包括的な人間ドラマの一部として呼び出される。

② 「コンテスト」

たとえば、ボクシングの文字どおりのモデルは闘いであろう。闘いのコンテストのフレーミングの限界は時代と共に顕著であるが、それは少なくともリクリエーションの分野においては残酷さの許容範囲の低下と競技者の危険の減少の印と見られる。ホッケーやテニスのように両サイドが構造化された反対側に組織され、特別の装置とゴールが用意されている場合には、第一次フレイムワークが適用されるだけである。組織されたスポーツ・ゲームにおいては日々の活動から益々遠くなるが、これらの活動に置かれた制限は引き込まれ、我を忘れるようになることができる活動に対する制限である。キーイングが歴史を持つとすれば、多分、第一次フレイムワークもまたそうであ

る。

③ 「儀式」

結婚式や葬式の儀式では普通と違う活動が進行するが、スクリプトされた行事のように、全ての行動の網の目が事前にプロットされており、リハーサルが行われ得る。しかし、リハーサルと実演とは違う。ステージの劇は日常生活を広く模倣するが、儀式では一つの行為を出来事の普通の流れから切り離す。要約すると、劇は生活を、儀式は出来事をキーイングするのである。儀式では進行係と参加者は明確に区別される。参加者は彼らの一層広い世界において重要な結びつき・効果を持つ何物かをこの機会に一举に実現する。劇においては演技者は自分自身ではなくむしろ役柄として現れるが、儀式においては自分の主たる社会的役割——親・配偶者など——として自分自身を代表する仕事をする。儀式はドラマやコンテストが持っている結果を伴うが、参加者によって——正真正銘の儀式から空虚なものまで——内容が違う。

④ 「技術的再行為」

功利的目的から普通の文脈を離れて、オリジナルなパフォーマンスとは違った目的で日常的な行為の断片が行われる。オリジナルな結果が伴わないことは当然とされている。これらの稽古 (run-through) は現代生活では重要であるが、あまり考察されていない。

(a) 「功利的な」

たとえば、模擬裁判や模擬練習などで技能の獲得を図る。普通の結果性からは切り離されている。多分、失敗やし損ないも、場合によっては手段として、起きる。劇や音楽ではリハーサルと言う。リハーサルでは全て

の部分が練習され、この最後の実践はスクリプトと共に実演を多かれ少なかれ、完全に予見させる。しかし、多くの活動は完全にはスクリプトできない。たとえば、スパイのTVドラマは実生活と違うシナリオによっている。またたとえば、軍事訓練ではシナリオは完全ではなく、常に再点検・修正されねばならない。念入りの行動が事前にプロットされる場合には、心の中で、あるいは紙の上で各ステップが試されるが、これをプランニングと呼ぶ。実地練習 (practizing) は単なる訓練ではなく、「リアルな事柄」に対する一つの意味を与える。

このフレーミングの限界の一つは、あまりに少な過ぎるか、多すぎる投資である。もう一つは実地練習そのものの特質である。すなわち、愛の告白のような「表出行動」の練習はしてはいけないのであって、その巧みさはあくまでも副産物に過ぎないことである。それは教えてもいけない。また実地練習は有能なパフォーマンスならばもはや関心を持たない局面に意識的に注意を向ける。たとえば、子供の発音訓練や舞台のリハーサルなど。つまり、行為の断片は始まりに過ぎず、「動機の重要さ」を含む全ての種類のパースペクティブと活用がもたらされねばならないのである。実地練習は最初は心配を和らげるために、易しいことから始めて、最後の場面では実生活よりも困難な事例を試みる。練習の世界は実際の実生活のそれよりも、一層単純かつ複雑である。それは実生活の世界に近づくけれども、決してそれを達成はしないのである (特に、戦争の場合)。

(b) 「デモンストレーションあるいはエキシビジョン」

商品販売のデモやフィギア・スケートのエキシビジョンなど、実演がどのようになるかを見せる。あるいは、教師が生徒に発音をやって見せたり、求職者が面接者の前である行為を演じて見せたりする場合もある。デモの限界は第一に、ベツトサイドでの教育のように、実際の治療を行いながら、処遇を説明する場合、少なくとも

も、患者の立場からは限界がある。第二に、実演よりもコストがかかったり、馬を痛めてしまったり、あまりに多くのドラマ性は不適切である。第三に、デモは実演と違っていなければならないから、本当の装備が使われる場合には限界がある。

(c) 「再現された記録、あるいはドキュメンテーション」

テープやビデオが最近、多用されている。裁判での証拠、産業でのストロボ検査、会話のテープ、X線フィルム、スポーツ・歴史的出来事・戦闘などの再現など。オリジナルの意味を抑えるドキュメンタリー・キーの力は印象的である。多様な限界が考えられる。倫理やプライバシーや事前告知の問題、承諾済ビデオの利用の可否・限度、たとえば、殺人現場の映像のような内容の問題など。これらの限界の変化は早い。

(d) 「グループ・セラピーあるいはその他のロール・プレイング場面」

(e) 「実験」

キー概念が使われるためには、実験者・被験者・観客が起こっていることは特定の種類の実験であると一致していなければならない。限界も明瞭で、生体実験や危険な実験、マスターズとジョンソンによる女性のオーガズムの実験など。

⑤ 「置き換え (regroundings)」

高貴な人が慈善行為として仕事をする、樵の仕事をリクリエーションとしてやる、徒弟の修業など、例はかなりある。

四 『共在』における経験の構造 ○ ファブリケーション (FA: 83-123, 156-200)

(一) 活動の断片はキーイングとファブリケーションと言う二つの世界を生み出す。第二の変換、ファブリケーションはでっちあげであり、一人あるいはそれ以上の個人が活動を管理して、他人の当事者が何が起こっているかについて誤った信念を持つように誘う意図的な努力を言う。以下、要約する。第一次フレイムワークで既に有意味とされているものを活用する点はキーイングと同じであるが、でっちあげでは騙す者と騙される者の認識が違う。反対は正直な活動であるが、この場合には全ての関与者にフレイムの輪郭が見える。

(二) 目的によって騙される本人のためになる、あるいは少なくとも本人の利害に反しない場合と、搾取的な場合がある。前者はどんな社会にもある。たとえば、実験目的や訓練目的の場合や、本人の信頼性をテストする場合、ガンであることを告知しないで治療する場合、競争企業による商品開発など。

後者は明らかに本人の利害に反するケースである。まず、信用詐欺 (con game) であるが、これはたとえば、アンケート調査と偽って相手の情報を不当に入手する場合、不正競争、虚偽広告などである。次に、誤った情報、たとえば、ありもしない不倫・妊娠の話の流すなどして人間関係を損なう場合などである。第三に、虚偽の証拠を作り上げて相手の競争相手に流して信用を損なう場合や、それを種に脅迫する場合など、間接的な形態である。

(三) 騙す人間と騙される人間とは違った種類の人間であることは確かであるが、自己欺瞞という現象もある。まず、ありもしない夢を見る場合、次に、非常に疲れていたために、あるいは薬物のために幻覚によって行為する場合、さらに精神障害による場合などが考えられる。また、関与者がごく一部しか関与していないなど、関与の仕方にも程度がある。

関与を始めた者が、自分の関与している活動の断片が自分の認識を越えており、何が自分をフレームしているかについて確信が持てない時に感じる「疑惑」(suspicion)、つまり、騙されているのではないかという感情と、通常の活動で適用されているフレームワークやキーについての疑い(doubt)とは違う。しかし、これら二つは経験がフレームされているやり方そのものによって生み出される中心的な感情なのである。

五 「共在」における経験の構造 D 活動の繋綴 (F.A. 247-300)

(一) 何が起こっているかについて理解がある時には、個人は自分の行動をこの理解に合わせるが、通常は進行中の世界がこの適合を支えていることが分かる。この組織的前提——それは心と活動の両者に支えられている——を活動のフレームと呼ぼう。特定のルールの適用によって解釈される活動、解釈者から適合的な行動を誘発する活動、つまり、解釈者に対して事柄を組織する活動はそれ自体は、物理的・生物学的・社会的世界に位置付けられている。フレームされた活動がどのように進行中の現実埋め込まれているかと言う問題は、二つの他の問題、すなわち、活動はどのようにキーイングされるか、ファブリケートされるかと密接に結び付けられている。ウィリアム・ジェームスは「如何なる状況の下でわれわれは事柄をリアルと考えるか」を問題にした時に、彼が想定したのは、現実自体では十分ではなく、その代わりに、何がリアルと考えられるかの確信の原則であった。結論として、われわれがわれわれの日常の現実の感じがどのようにして生み出されるかを学ぶことができるのは、現実がどのようにして模倣されるか、でっちあげられるかを検討することによってなのである。

(二) 特定のやり方でフレームされた活動は、何らかの印で周りの出来事の流れと切り離されている。時間・空間

の囲みがあつたり、始まりをライトを暗くして幕を上げること、終わりをライトをつけて幕を降ろすことで示すやり方。式典の始まりを示す「エピソードイング慣行」や、フットボールのキック・オフのような例もある。数学の括弧や文章の構文法上の記号の場合のようにエレガントな例もあるが、講演の始めに弁明をしたり、冗談を言ったりすることや、始めの言葉が舞台とフレームを設定する限り、この言葉を言うことが重要なのである。エピソードイング慣行は時代と文化によって異なる。

(三) 時間による囲いは「外部的なもの」であるが、「内部的なもの」もある。たとえば、フットボールのクウォーターの休憩やコーヒー・ブレイク。役割サイクルとの関係も考慮しなければならない。たとえば、昼夜二公演の場合の昼の公演の終わりは「内部的なもの」だが、夜の公演の終わり、特に全部の公演の終わりは「外部的なもの」である。

ケネス・バイクが言う「ゲーム」と「スペクタクル」の区別もある。前者はたとえば、ある演奏であり、後者はこの演奏が組み込まれている社会的出来事である。スペクタクルからゲームへの転換は典型的にはフレームの交換を伴う。後者の場合は日常生活の場合よりも狭く組織されている。室内楽のコンサートでのアナウンサーの役割は、演奏者の舞台への登場とそれに続く演奏開始の前に、放送を始めなければならない。公式の、内部的な始まりと、非公式の、外部的始まりがあるのである。休憩のカーテンもドラマは一時中断し、一つのエピソードは終わるが、フィクションの世界は続いており、社会的出来事——「スペクタクル」——は終わっていないことを示す。公式の手続の場合には、開廷と閉廷の言葉は裁判官によるというように公式化されており、明確である。

(四) ある活動に参加した場合に、フレーミングは「人—役割—公式」に結び付けられる。この場合に、本質的な

区別が問題なのではない。役割は純粹に社会的なものでないし、たとえば、母親の役割について混乱が見られるように、生物学的観点だけで決めることはできない。まず、キャスティング(casting)であるが、年齢・性別・階級・エスニシティの要因が現実には働いている。また、技術的要因も考慮される。

社会的基準も働いている。たとえば、子供の芸人の場合に、長期の公演には教育の配慮が要求される。責任の問題もある。たとえば、上司の命令で酷いことをやった部下の責任や、精神障害者の責任問題など。さらに、どんな髪形や衣服を着るかが場合によっては「フレームを外れた」行為と見なされることもある。役割に相应しくない活動に従事することも「フレームを外れている」とされることがあるし、医者診療行為において患者が自分を対象として預ける場合にも、どこまで委ねるかが問題となる。

(五) もう一つは「役割—性格—公式」である。役割を演ずる時に、あまりに夢中になると問題になる場合があるが、今日ではこの点では極めて柔軟である。しかし、性別・年齢・人種・階級の問題がやはりある。またアメリカ大統領が出演することは好ましくないとされることがある。公式の法的制限の背後に、しばしば人についての基本的想定が見い出されるが、それはわれわれのフレーミング概念にとって意味がある。

繰り返し同種の役割を演ずると、実生活でもその役柄のような人間と考えられることがある。プロレスでも同様に、たとえば、悪役の役割は固定される傾向にある。つまり、われわれの社会には個人は同じ人間なのに違った面で違った役割を平気で演ずると考えられている。他方、演技者はある役割を演ずる場合に、その社会的アイデンティティを採用することを通じて、パフォーマンスを越えて自分の個人史とパーソナリティを持ち込むとも考えられている。しかし、役割を偽る場合には、この偽りの役割の獲得は、そのような個人性の獲得であり、個人史に

繫锚していると想定されるのである。

(六) 個人の資源が継続することの表現の一つは、表出アイデンティティの維持、すなわち、スタイルである。たとえば、ナヴァホ・インディアンには彼らなりの「語り方」があろう。スタイルとはキーイングであり、あるものを他の何物か（あるいは、他の何物かの変換）に従ってモデル化することである。一般にはスタイルは、僅かにキーイングを変えただけである。スタイルは意図されると偽りであると感じられるものであり、犯罪者の手口 (modus operandi) は「まかそうと努力しても現れるものなのである。このようにスタイルは行為者が自分の行為にもたらしただけであり、われわれは容易にそれを認識できると考える。ある活動はそれを行う個人を——個人的にいくら入れこんだとしても——完全に作り変えはしない。

(七) われわれが個人を扱う場合には、われわれはその個人の行為は全て彼のパーソナリティ・性格・人間としての質を感じさせると期待する。これが他人についてのわれわれの認識の、普通のフレーミングの仕方である。「役割—性格—公式」や「人—役割—公式」もそのような意味を含んでいる。フィクションの作家の場合には作品の登場人物を通じて自分を語っていると考えられているが、劇作家の場合——ノンフィクション作家の場合も——そうではなく、登場人物に語らせていると考えられている。しかし、このフィクション作家のイメージは幻想であろう。確かに登場人物は作家の創作であるから、作家の何物かが持ち込まれてはいようが、それは創作である以上、作家のものではない。そもそも、複数の登場人物がいる場合には、どのように解釈するのだろうか。現実のフェース・トゥ・フェースの相互行為においてもそうなのだが、主として副次的なチャンネル・トラックで「役割距離」が示される。

われわれが特定の場面を使う資源は、当然、ある連続性を、その場面が起る前に存在しており、場面が終わった後も連続している存在性を持っている。これが現実の一部であると全く同じく、そうであるという考え方もまた現実の一部であり、そのようにして、それは付加的な効果を持っている。性格のこの継続性は問題の事柄の連続性によってわれわれに強制されたものではなく、精神的事柄の連続性についてのわれわれの考え方——文化的信念——なのである。

第三章 アルフレッド・シュッツと生活世界

一 アルフレッド・シュッツの自然的態度の構成的現象学⁽¹⁾

(一) アルフレッド (アルフレート)・シュッツ (Alfred Schütz) は一九六〇年代に「発見」され、その後、本格的に検討されるようになる。そのシュッツ「発見」の文脈については論者によって違いがあるが、今日のシュッツの取り上げ方を見れば、それは「日々の生活世界」「日常生活世界」の探求の先駆者ということであろう。⁽²⁾ シュッツの立場はフッサールの超越論的立場ではなく、自然的態度の構成的現象学あるいは現象学的社会学であると言つて良いであろう。⁽³⁾ そこでまず、この立場を簡潔に説明しよう。「自然的態度」とはたとえば、「人間が日課を自発的に型にはまった仕方で行う際にとっている心的な姿勢。人間が生活世界全体をまたはその諸側面を解釈する際の基礎。生活世界は自然的態度の世界である。そこでは物事は自明視されている」と説明されている。⁽⁴⁾ シュッツの「自然的態度」の状態にある人間はフッサールの「判断停止 (エポケー) √とは違って、「物質的および社会的現実

にたいするみずからの信念を留保するのではなく、まったく反対なのである。それが見えてくる以上の何ものかではないかという疑いを、留保するのである」⁽⁵⁾。ここで注意しなければならないことは、この「自然的態度」がどのような人間を基準として考えているかである。

(二) まず、『社会的世界の意味構成』(一九三三年)においては見られないのであるが、後期の著作では「専門家(the expert)」は良⁽⁶⁾として、「見識ある市民(well-informed citizen)」が「市井の人(the man on the street)」と区別されている。「専門家の知識は一定の領域に限定されているが、その領域の内部では明晰で判明である」。他方、「市井の人は必ずしも相互に整合性があるとは限らない多くの領域についての実用的な知識を持っている」。その知識は、類型的状況において類型的手段によって類型的結果を生じさせるにはどうすれば良⁽⁶⁾いかを指示する料理教室的知識である。「見識ある市民とわれわれが呼ぶことを提案している理念型は……専門家と市井の人の理念型の中間に立っている。一方で、見識ある市民は専門家になることを目指しているのでもなく、その知識も持っていない。他方、彼は単なる料理教室的知識の基本的なあいまいさや、自分の明確でない感情や情念の非合理性に黙従しているわけでもない。彼にとって見識があるとは、自分の当面の目的には関わりがないけれども、少なくとも自分にも間接的には関わりがあると分かっているように領域において、合理的に根拠づけられた意見に到達することを意味する」と(以上、三・一七三—一七四頁)。

この三理念型は構成概念であるから、われわれは日常生活において、三者のいずれでもありうるのだが、それぞれは違った知識領域に関わり、しかも、事物を自明視する心構えが違うのである。まず、市井の人は自分(たち)の選択した関心に従って、自分自身の、あるいは自分の内集団の諸々の固有内在的な関連性の内で素朴に暮らして

いる。われわれの選択した関心に関連がなく、自由裁量による行為からは生まれないが、しかし、あるがままに受け取らなければならない諸々の状況や出来事という、「賦課された関連性」には関心がない。これに對して専門家は自分の領域内で賦課された諸々の関連性を、唯一の、自分の行為と思考の固有内在的な関連性として受け入れている。見識ある市民は無数の準拠枠に帰属する領域、しかも関連性が何時、変化するかもしれない領域に置かれており、対処するためには合理的な意見を形成するために情報を求めなければならない(以上、三・一七九—一八四頁)。最後に「民主主義を、見識のない市井の人の意見が支配的にならない政治制度と誤って解釈する傾向は、危険を増大することになる。だからこそ、民主主義社会においては、見識ある市民が、自らの私的な意見を市井の人の世論に勝るようにすることが、そうした市民の義務でもあり特権でもあるのである」と(三・一八九頁)。

(三) 浜日出夫はシュッツの「自然的態度の構成的現象学」はこの「見識ある市民」の立場に立つてものであると言⁽⁷⁾う。しかし、これは違うと思う。前述のように、シュッツ自身が「実際は、日常生活においてわれわれはそれぞれ、いかなる時にも同時に専門家であり、見識ある市民であり、また市井の人でもあるが」と言っているし(三・一七四頁)、シュッツの日々の生活世界の分析はシュッツが現象学者・社会学者として、つまり、専門家として行ったものであり、考察の対象が見識ある市民に限定されているとは考えられないからである。たとえば、「自然的態度にとってこの世界は、はじめから、個々人の私的な世界ではなくわれわれすべてに共通する相互主観的な世界であり、われわれが理論的な関心ではなくすぐれて実践的な関心を向ける世界なのである。日常生活の世界は、われわれの諸々の行為と相互行為の舞台であり、そしてまたその対象でもある。……かくして、日常生活の世界に對す

るわれわれの自然的態度を支配しているのはプラグマティックな動機である、というのは的を得ているといえよう。この意味で、世界は、われわれが自らの行為によって変様すべきものであり、あるいはまた、われわれの行為を変様させるものである」(二・一一—一二頁)。「われわれはここで、日常生活での世界の常識的経験を分析することに關心をもっているだけであるので、次のことを述べておけば十分であろう。すなわち、人間は、他の人びとの身体的存在、彼らの意識的生、相互のコミュニケーションの可能性、および社会組織や文化の歴史的所与性を自明視しており、そしてそれらはちょうどその人間がそのなかに生み込まれた自然の世界を自明視しているのと同じである、ということである」と(二・一四四頁)。

以下、シュッツの分析の諸結果をできるだけ簡潔に述べる。

二 人間行為の常識的解釈と科学的解釈——二重の解釈論

(一) シュッツは社会科学の対象である人間行為の常識的解釈、すなわち、日々の生活世界で生きる人々が自然的態度において行う解釈と、科学的解釈を区別する。それは「生活史的に規定された状況から科学的状況への移行に起源を有する」(一・九一頁)。人間は蒸留器の中で合成されるものではなく、母親から生み落とされるものであるから、形成期のそれぞれの生活は独自の仕方で実現される。「人は、自らの日常生活のいかなる時点であっても、生活史的に規定された状況の内に、すなわち、自らが定義した物理的環境および社会・文化的環境の内に、自らを見出す。彼はその環境の内部で、ただ単に物理的空間および外的時間という観点からみた位置、社会体系における地位と役割という観点からみた位置を占めているばかりではない。彼はさらに、道德的ならびにイデオロギー的な

位置をもその内部で占めているのである。こうした状況の定義が生活史的に規定されているということは、それが自らの歴史をもっているということである。すなわちそうした状況の定義とは「それを行う」人の以前の経験すべてが、その人の利用可能な知識の集積という習慣的な所有物の内に組織化されることによって沈殿したものである。したがって、状況の定義はそのようなものとして、彼に対して、しかも彼に対してのみ与えられている、彼に独自の所有物である」(一・五六―五七頁)。「常識的な構成概念は、あらかじめ仮定されている視界の相互性を決定する、世界の内の『ここ』を起点に構成される。そうした構成概念においては、社会的に獲得され社会的に是認された知識の集積は、自明視されている」。「このことは社会的相互行為の当事者だけではなく、自分の生活史の状況に留まる観察者にも妥当する」(一・九一―九二頁)。

しかし、社会科学者は確かに日常生活にあつては人々の間で生活し、それらの人々と相互に関係し合っているけれども、「社会的世界の内にいかなる『ここ』ももっていない。それゆえに社会科学者は、自分を中心にしてその周りに層をなす形でこの世界を組織したりはしない」。「より正確に言えば、社会科学者は、社会的世界における自らの位置とそれに付随する関連性の体系を共に、自らの科学的営為にとつて関連がないと考えるのである。彼の利用可能な知識の集積とは、彼が携わる科学の集成体にほかならない」。「科学者のこのような知識の集積は、日常生活を営んでいる人びとの利用可能な知識の集積とは全く別の構造から成り立っている」。「……社会科学者は、人間の諸々の相互行為パターンやそれらの諸結果を、彼の観察が及びうる限り、そしてまた彼の解釈に対して開かれている限り、観察する。しかもその観察は、科学的態度をもつて行われる。だが、彼が『社会的現実』を把握しようとするいかなる希望も放棄するわけにはいかなないのであれば、彼はそれらの相互行為パターンを、その主観的な意

味構造の観点から解釈しなければならない」(一・九二—九三頁)⁽⁸⁾。

(二) シュッツはさらに、アーネスト・ネーゲルとカール・ヘンペルの感覚論的経験主義あるいは論理実証主義の立場に立つ主張に次のように反論する。「社会的現実を説明しようとする理論は、それが社会的世界についての常識的な経験に則したものであるためには、自然科学の諸原則を適用するのとは逆に、自然科学にとっては無縁のそれ自身に特有の方策を展開しなければならない」。「このような事態は、社会科学において構成される諸々の思维対象、すなわち心的構成概念と、自然科学において構成されるそれらとの間には、構造の上で或る本質的な相違が存在しているという事実に基づけられている。自然科学者は、自ら携わっている科学の手続き上の諸基準に従って自らの観察領域を定義し、さらにその領域内で、自らの当面の問題や当面の科学上の目的に関連のある事実やデータや出来事を決定するが、そうした定義や決定は、その自然科学者が自ら責任をもって、しかも自分だけの責任において行わねばならないことである。それらの事実や出来事は、自然科学者に先立ってあらかじめ選定されてはおらず、またその観察領域も同様に、あらかじめ解釈されてはいない。自然科学者によって究明されるものとしての自然界は、「それを構成する」分子、原子、電子にとってはいかなる「意味」も有してはいないのである。それに対して社会科学者の観察領域——社会的現実——は、そのなかで生活し、行為し、思考する人びとにとって、或る特定の意味と関連性の構造を有している。それらの人びとは、自らが日常生活の現実として経験するこの世界を、一連の常識的な構成概念によつて社会科学者に先立ってあらかじめ選定し解釈している。そしてまさしく彼らの有しているこれらの諸々の思维対象こそが、彼らの行動を動機づけ、そうすることによつて彼らの行動を規定しているのである。社会科学者がそうした社会的現実を把握しようとするれば、彼の構成する思维対象は、社会的世界のな

かで自ら日常生活を営んでいる人びとの常識的な思考によって構成された思惟対象に、基づけられていなければならない。したがって、社会諸科学の用いる構成概念は、いわば二次的な構成概念である。すなわちそれは、社会的な場面にいる諸々の行為者が構成した構成概念の構成概念である」(一・一二二—一二三頁)。それはギデンズの言う⁽⁹⁾「二重の解釈学」なのである。

三 多元的現実論⁽¹⁰⁾

(一) 「ひとたび確立された準拠図式が有効である限り、すなわち、われわれや他の人びとの保証された諸経験から成る体系が有効である限り、言い換えれば、そうした経験の体系に導かれて遂行される諸々の行為や操作が望まれた結果をもたらしている限り、われわれはそれらの諸経験を信頼するのである」。「諸々のことがらは、それらが現実にあるように与えられているとわれわれは信じている。そして、それらのことがらをそのように与えている保証された諸経験に関して、われわれは、それらを懐疑の対象にするいかなる理由ももっていないのである」。「われわれはここで、自然的態度のうちにいる人もまた、現象学者が用いるものとはもちろん全く別のものであるが、或る特定のエポケーを用いていると、あえて言っても差し支えないだろう。彼は、外的世界やそこにある諸々の対象に対する信念を停止しているのではない。それとは逆に、それらの存在に対する疑念を停止しているのである」。「われわれはそうしたエポケーのことを、自然的態度のエポケーと呼ぶことにしたい」(二・三六—三七頁)。

(二) 「われわれが下位宇宙『ウィリアム・ジェームズが様々な現実の秩序を表す用語——筆者』についてではなく、意味領域について語るのは、現実を構成しているのは諸々の対象の存在論的な構造ではなく、われわれの諸経

験のもつ意味だからである。それゆえ、或る一連の経験すべてが或る特有の認知様式を示し、しかも——その様式に関して——各経験がそれ自体で一貫しているだけではなく、さらにそれぞれの経験が互いに両立可能である場合に、われわれはそうした一連の経験のことを限定的な意味領域と呼ぶのである」(二・三八頁)。

六つの命題に整理できる。①夢・心像と空想的想像物とりわけ芸術・宗教的体験・科学的観照・子供の遊び・狂気の世界、これら諸々の世界はすべて、限定的な意味領域の世界である。(a)それらの世界はいずれも、固有の認知様式を持っている(自然的態度の内にある労働の世界のそれとは違う)。(b)それぞれの世界の内では、経験はすべて、その認知様式に関して見れば、それ自体で一貫しており、さらに両立可能である(日常生活の意味とは両立不可能)。(c)それら限定的な意味領域は、それぞれに特有の現実のアクセントを付与されている(労働の世界のそれとは違う)。(d)②諸々の経験が、それ固有の認知様式に関して一貫しており、両立可能であるということは、それらの経験が属している個々の意味領域の内部でのみいえることである。(e)③まさしくこうした理由から、われわれは限定的な意味領域について語ることが許されるのである。ある意味領域から別の意味領域への移行は、キルケゴールの言う「飛躍」によってのみ可能であり、それはショックという主観的な経験のなかで現れて来るのである。(f)④「飛躍」「ショック」は、われわれの意識の緊張が異なった生への注意(attention *a la vie*)に基づけられることによって、根源的な変様を被ること以外の何ものでもない。(g)⑤かくして、様々な意味領域のそれぞれに固有の認知様式には特有の緊張が伴っており、したがってまた特有のエポケー、自生性の支配的な形態、自己体験の特有の形態、社会性の特有の形態、特有の時間パースペクティヴが伴っている。(h)⑥日常生活における労働の世界は、われわれの現実経験の原型である。それ以外の意味領域はすべて、その変様とみなすことができるだろう(二・四〇—四二頁)。

(三) 個々人が自らの現実の核として経験する労働の世界の層のことを、その個人_{の到達可能な範囲内の世界と呼ぶ}。それはミードの操作可能な領域、目で見、耳で聞くことのできる事物、その個人_{の到達可能な範囲内の世界と呼ぶ}の労働に開かれてい世界、隣接した潜在的な労働の世界を含み、しかもそれらの諸領域は諸々のフリンジ(周縁)と開かれた地平を伴っており、したがって個々人の到達可能な範囲内の世界は、ここといまという空間・時間の座標体系のゼロ点を移動させることで、すなわち、個々人の関心や注意する態度の変様によって変化する。個々人の到達可能な範囲内の世界は本質的には、現在時制に属するが、潜在的には過去の領域、つまり、以前実際に到達可能な範囲内にあったもの(回復によって到達可能な範囲内の世界)と、未来に到達可能な範囲内のもの(達成によって到達可能な範囲内の世界)にも及ぶ(二・二九—三四頁)。

(四) 日常生活の外的世界は \wedge 至高の現実(paramount reality) \vee である。何故なら、①われわれは夢を見ている間ですら、それ自身、外的世界の事物であるわれわれの身体によって、常にその世界に参加しているから。②外的諸対象は、それが克服されるとしても、ただわれわれの努力によってのみ克服されるにすぎない抵抗をわれわれに与えることによって、われわれの自由な行為の可能性を制限するから。③その世界は、われわれが自分たちの身体的活動によって関与しうる領域であり、それゆえに、われわれが変換または変換しうる領域だから。④したがって、この領域内で、しかもこの領域内でのみ、われわれはわれわれの仲間とコミュニケーションができ、フッサールの言う意味での「共通の了解環境」を打ち立てうるからである(二・一八〇頁)。

四 目的動機と理由動機⁽¹⁾

(一) 行為は動機づけられた行動である。まず、殺人者の動機は被害者の所持金を奪うことであつたという場合、動機は企てられた行為によつてもたらされるはずの事態、すなわち、目的を意味している。われわれはこの種の動機を「目的動機 (das Um-zu Motiv, in-order-to Motive)」と呼ぶ。行為者の観点からは、この部類の動機は行為者の未来の事柄に關している。企図される行為、つまり、未来の行為によつてもたらされるはずの、前もつて空想的に想像された事態が、その行為の目的動機を構成している。殺人を犯す企図を実行する意思がなくとも、殺人の企図はできるから、「……するために」という目的の形で動機づけられるのは、空想を行為に変換する「自発的フィアット」、つまり、「さあ、やろう!」という決断である。

(二) 目的動機に対してもう一つの動機を区別しなければならない。それを「理由動機 (das Weil Motiv, Because Motive)」と呼ぶ。殺人者はしかじかの環境で育つたから、あるいは子供時代にしかじかの経験をしたから、殺人を犯したなどと言う(「だから動機」)。理由動機は行為者の過去の諸経験に關係している。お金を手に入れるには殺人以外にも多くの方法があるから、殺人の企図そのものが行為者の個人的状況、もっと正確に言えば、彼の個人的諸事情の内に沈殿した彼の生活史によつて引き起こされたのである。

(三) 目的動機は進行中の行為の過程のただ中に生きる行為者の態度に關係している。この場合には理由動機は念頭にない。それは本質的に主観的なカテゴリーである。これに對して、理由動機は行為が完遂された後、あるいは初期段階の行為が完遂された後で、回想して把握することができものなのである。未来完了的に、すなわち、空想の中で企図した行為を自分が行つたとして、何故かを問うこともできよう。真正の理由動機は過去あるいは未来

完了の諸経験にのみ関係しており、回想的なまなざしに対してのみ姿を現す。したがって、真正の理由動機は客観的なカテゴリーであり、観察者あるいは観察者となりえた行為者によって過去の行為と結果から構成されるものである。したがって、「……だから」という文章で「……するために」という目的関係を表すことが普通であるが、「……するために」という文章では真正の理由関係を表すことはできないのである(二・一三八—一四二頁)。

第四章 エスノメソドロジーによる日々の生活世界における経験の分析

一 エスノメソドロジーとは何か⁽¹⁾⁽²⁾

(一) エスノメソドロジーは、伝統的な社会科学・人間科学・社会学とは対象の捉え方と方法の面で決定的に違うので、なかなか受け入れられなかった。一体、どこがどのように違うのだろうか。⁽³⁾ ガーフィンケルはハーヴァード大学でタルコット・パーソンズの指導の下で博士論文を書いた。パーソンズの『社会的行為の構造』の出版五〇周年を記念した一九八七年のアメリカ社会学会における講演の中で、ガーフィンケル自身が次のように述べている。

「紙面が許す簡潔な注釈として、私はパーソンズの研究テーマ日程表を、議論からスローガンの復唱に縮小しなければならぬ。……第一のものはホップスによって定式化された社会秩序の問題であった。もう一つの、これと動かし難く結び付いているものは、実際の行為・推論の実際の客観性・観察可能性という喧しい問題が——喧しいが故に——理論化の諸要求の適切性の立脚源・地盤として役立つように要請されるという、何時も企てられ、しかも終わりのない、理論化の仕事である。第三に、あらゆる実際の調査研究においても、重要性の優先性は、如何に暫

定的なものではあれ、社会秩序を同定する諸現象という問題を明確に述べるための経験的研究に与えられていたことである。総括すると、社会学の確立した仕事は、社会の働きとして——現実の働き、実際の働きとして——普通の社会の中断の無い産出・説明可能性を明らかにするための諸問題を明確化することであった。「概観すると、『社会的行為の構造』からわれわれが学ぶことができると思われるのは、充満 (plenum) には秩序らしきものは無いということである。われわれは『社会的行為の構造』から具体的にある行為と、分析のためにある行為をどのように区別するかを学ぶであろう。そして、われわれはこの区別を研究・議論の変転とローカルな偶然性を越えてどのように管理するかを学ぶであろう」と。⁽⁴⁾

(二) パーソナリティは周知のように、社会秩序の問題を個々の行為者による規範の内面化によって説明するのだが、ガースンケルはエスノメソドロジの立場を八点に整理している。第一に、エスノメソドロジ研究の報告する現象は、『エスノメソドロジ的無関心』の行使の下で、ユニークな方法によって利用可能になるが、伝統的な分析の方法にとっては利用可能ではなく、論証できない。第二に、社会科学運動は、自分達の研究日程表に基づいているとされるが、その日程表を無視している。第三に、報告された現象は、社会科学運動の還元的方法では、失われるほか無い。第四に、報告された現象は、調査できないケースなのであり、定義・比喩・モデル・構成・類型・理念の設計・解釈の技法では利用可能でない。それらの現象は、如何に思慮深いものであっても、一般性を描くことで実践を明確にしようとする試みによっては搜し出せない。第五に、それらの現象は発見されたのであり、想像されるわけではない。第六に、それらの現象は、実際の行為において、実際の行為として産出された秩序の諸問題に関心を持っている「学科」の仕事において、そのような「学科」の仕事として「基礎づけ」問題を明確にしてい

る。第七に、これらの現象はローカルに内発的に生み出され、自然に組織され、詳細において、詳細として反省的に説明可能なものであり、その点においてそれらの現象はそれら詳細がありうる全てを用意している。第八に、「これらの現象は秩序というトピックとしての詳細を正しく用意しているだけではなく、論理・秩序・理性・意義あるいは方法といういかなる、そして全てのトピックは、ローカルに達成された秩序現象としての再明確化に対して適格である。詳細というトピックのみならず、秩序というトピックも発見されねばならず、発見可能である。そして、それはただローカルに反省的に産出され、自然に説明可能な秩序現象として、再明確化すべきであり、再明確化できるのである。これらの秩序現象は、不滅で、普通の社会のありふれた、卑俗な、おなじみの、避けられない、取り返しつかない、そして、無関心な『街頭の仕事』なのである」。「要約すれば、これらの研究でエスノメソドロジ的なのは、それらが普通の社会の実質的な出来事に関して、実体的な内容において、構成員たちが協調して自分達の普通の生活全般において、そして普通の生活全般として、緊密性・説得性・分析・一貫性・秩序・意義・理性・方法を生み出し、示すという自分達の活動——それはローカルで反省的に説明可能な秩序らしきである——を行っているということ、そして正しくどのようにして行っているかを詳細に示していることである」⁽⁶⁾。

(三) 他のエスノメソドロジストの文章によって補完しよう。リーナ・ジェイウシは「社会学がエスノメソドロジストの仕事において『言語学的転換』から離陸したのと全く同様に、今や哲学がエスノメソドロジストの仕事において、知り得ることと道徳性への探求に向かう、『社会—論理的転換 (socio-logical turn)』に遭遇している」と言う。「ガーフィンケルの紛れもない達成は、この観点から見ると(そして彼の達成は、単一な問題やパラメータのセツトに要約されることに明らかに抵抗する)、社会秩序の規範的根拠をはっきりさせることにあった、しかも、そ

れをある一般的な理論的視点や形式的原則としてではなく、特定の情況において作動中の、取り返しのきかないように状況づけられた、秩序の産出の詳細——すなわち、状況においてローカルな知り得ることの組織化と、その知り得ることが『背後期待』に規範的に埋め込まれていること——そのような詳細において、そしてその詳細を通じてはつきりさせることであつた。『どのようにして社会秩序は可能となるのか』とは、ガーフィנקルの仕事においては次の二つ、すなわち、(i)『どのようにして』という疑問に対する正しい解答である、産出された詳細に焦点を置くことと、(ii)『社会秩序』という包括的観念を日常生活の種々の機的情況の特定の実際の『秩序』の観念へと解体することによって、再構成されるべきものとして見ることができる問題である。行為者と研究者の両者によって遭遇され、志向されているように、検討されれば、『マクロな』社会秩序の産出的構成要素であることが判明するのは、これらの『秩序』なのである⁽⁷⁾と。

二 背後期待

(一) ガーフィנקルは最初の陪審員の研究から、アルフレッド・シュッツの影響を受けているが、初期の本格的な論文『日常活動のルーティーンの基盤』⁽⁸⁾によってガーフィנקルの基本的な論旨を見よう。この論文にはその後更に展開される理論的萌芽が多数含まれている。

「日常活動の安定した特徴を説明する」場合、「社会的に標準化され社会の基準になっている特徴」、すなわち、『見られてはいるが、しかし気づかれずに (seeing but unnoticed)』日常的な場面の背後にあると期待されている特徴についての考察は「まったくおこなわれない」。「社会の成員は、この背後期待 (background expectancies) を

解釈図式として使用している。成員がこれを使用することにより、現実の外観は、成員にとりなじみぶかい『出来事』の外観として認識され理解可能なものとなる。成員はこの背後の基盤に敏感に反応するけれども、同時に、この背後期待が何から構成されているかを、明確に語ることは当惑を覚えてしまうのである」(『日常性の解剖学』三四—三五頁)。「社会学者のなかでただ一人、故アルフレッド・シュッツ」は「この背後期待を『日常生活の態度 (attitude of daily life)』と呼び、この態度により見られる場面の特性を『共通に知られており、かつ自明視されている世界』として示している」(同三五頁)。ガーフィンケルはいわゆる「破棄実験」、つまり、共通理解、背後期待を破棄する実験によって、われわれの日常生活がいかにこれらに基づいているか、背後期待の僅かな破棄がいかに激しい当惑・反発・感情を引き起こすかを印象的に明らかにしている。

(二)「いろいろな考察からわかるように、共通理解 (common understanding) は、なんらかの話題について、内容が厳密に確定されている合意を人びとが共有していることから形成されているわけではない」(同三二六頁)。一般に行われている会話を分析すると、次のことが分かる。「(a)当事者たちが、話題になっていると知りながらも、しかし決して触れることのなかったような事柄がたくさんある。(b)当事者が理解していた事柄のうち、多くのものは、実際に語られたことだけにもとづいていてのではなく、語られないままにされたことにもとづいて理解されている。(c)発話は時間的に連なりながら行われていくことに注意が払われており、それとともに、多くの事柄は、単なる文字列としてよりも、むしろ会話が現に展開されていることを示す例証的な資料 (documentary evidence) として理解されている。(d)二人が共通して理解した事柄は、現に理解が進められていくなかで、しかもこれを通して、初めて理解されたものである。この場合、理解を進めるとは、現に行われた言語的な出来事を、この出来事の根底

にある基本的パターン (underlying pattern) の『事例資料』として、あるいはこの基本的パターン』を指し示すもの』として、またそれを基本的パターンの代表的な事例として取り扱うことに他ならない。つまり、個々の事例について、話せば相手に伝わると各自があらかじめ想定している場合、その根底には、つねにこのように基本的パターンが存在しているのである。また、基本的パターンは、一連の例証的資料『個々の発話』から推定されるだけではない。ひるがえってこの例証的資料そのものが、基本的パターンについてすでに『知られたこと』および知られうると予期できることにともづいて解釈される。つまり、例証的資料と基本的パターンとは、それぞれ他を精緻化し合うために使用されるのである。⁽⁹⁾『(e)各当事者は、(△)会話内での出来事』としての発話に留意する時、『過去の』生活誌を参照し、また現在の相互行為がどうなるかを予期している。しかも、それを、解釈や表現のための図式として各自で使用するともに、他者も同様のことを行っていると考えている。つまり、それを解釈や表現のための共有された図式とみなしているのである。(f)各当事者は、何について語られていたのかを聞き取るために、次に何が語られるのかを待ち、しかもそれを進んで待つているように思われる』と(同三八—三九頁)。

(三)「シュッツによれば、△人びとは以下で述べる一項目の内容を仮定し、また他者も同様にその内容を仮定しているのだと仮定し、さらに彼が他者はこれらを仮定しているのだと仮定しているように、他者も彼がこれら同様の内容を仮定しているのだと仮定しているVのである」。

「1 ある出来事がある人が見た時に、その出来事に対してその人の与える規定が有効であるためには、個々人の個人的な見解や社会的に構造化されている個々人の諸事情がまったく無視されていなければならない。つまり、この規定は『客観的に必然的』もしくは『歴然たる事実』でなければならないのである。2 △現にあるがままの

対象の外見 \vee と、 \wedge そのように特定の現れ方をしている当の対象それ自体として意図されているもの \vee との間の疑いような不一致関係は、公認されている関係に他ならない。3 知られている出来事は、まさにそれが知られているがゆえに、そこに居合わせて見ている者に現実的にも潜在的にも影響を及ぼし、その者の行為により影響を受ける。4 出来事の意味とは、その意味を使用する者の体験の流れが、社会的に標準化された仕方で命名され、物象化され、理念化された結果に他ならない。すなわち、言語の所産に他ならない。5 ある出来事に現在与えられている規定は、それがいかなるものであろうとも、以前の出来事にも用いられたことがあるものであり、また将来の出来事にもまったく同じように何回でも用いることのできるものである。6 出来事を意味づける時、その意味は、体験の流れのなかで変わることなく時間的に同一のままであり続ける。7 出来事が解釈されるためには、その背景として、(a)標準化されたシンボル体系からなる解釈図式を「他者と」共同で利用できなければならぬし、また(b)「誰もが知つて、いること」があらかじめ確立されていなければならない。すなわち、社会的に保証されている知識の集積が前もって確立されていなければならない。8 ある出来事がある人が見ている時、その人に対してその出来事が実際に得る規定は、その人と他者とが立場を交換したとしても、やはりその他者に対してその出来事が得ることになるう潜在的な規定でもある。9 それぞれの出来事に対して付与されている規定は、それを見ている本人および例の他者のそれぞれ固有の生活誌に起因する。それを見ている本人の目から見れば、このような諸規定は、それぞれ二人の目下の目的とは一切無関係である。むしろ、それを見ている本人と他者は、出来事の現実的な規定ないしは潜在的にありうる規定を選択しまたそれに解釈を施す時、ともに経験的に同じような様式でそれを行なう。というのも、彼らのあらゆる実際の目的に照らしてそうでなければならぬからに他ならない。10 ある

出来事について、その公的に承認されている規定と、私的なかつ自制された規定との間には明らかに食い違いが存在している。しかも、この私的な知識は用いられないまま留保されている。すなわち、出来事は、それを見ている当人と例の他者の両者に対して、当人が語りうる以上のことを意味している。11 このような明らかな食い違いを、それを見ている当人は自律的に統制することで修正することができる」と(同五九—六〇頁)。

(四) このような共通理解は瞬時瞬時に構成されるものであることに注意しなければならない(同四—頁)。また、「共通理解の諸事項がいかに明確に規定されていようと——契約はこの諸事項が明確に規定されている場合の範型と考えられる——その諸事項が、成員たちにたいして合意としての地位を占めるのは、次の場合だけである。すなわち、明記された諸条件「事項」が、言明されてはいないけれども理解されている、等々の条項(et cetera clause)を伴っている限りにおいてのみである。つまり、等々の条項が効力をもつことにより、細目にまで及ぶ協定が、合意された規則「前もって存在している合意」にもとづいて形成されるのである。それゆえに、このような協定は、ある一時点で一度だけ起こるというわけではない。諸活動が内的時間及び外的時間にそって経過していくまさにそのなかで、したがってまた、状況やその付随条件がしだいに展開していくまさにそのなかで、協定はそのつど取り結ばれていくしかないのである」と(同八三—八四頁)⁽¹⁰⁾。

(五) 肉体的には男性であるアグネスが性転換手術を受ける前後において、いかにして女になり続けたかについての分析において、ガーフィンケルは言う。「彼女の特殊性は次のことにあった。彼女は、社会的に認知され、社会的に操作されたセクシュアリティという『日常生活においてごくあたりまえになっている事柄』を操作によって生み出されたものとして扱ったのである」。「成員たちと共同して、アグネスは、彼らがどうやって正真正銘の男性

や女性として生きるための権利に関しての証拠を、互いに対して提供しあっているのかを、どうかして学んだ」。「すなわち、正常な性別をもった人間とは、それぞれの社会における文化的な出来事なのである。そして、成員の認知およびその認知を生み出す実践によって、その文化的出来事の実際の活動における目に見える秩序という性格が生まれるのである。……成員の実践そのみが、人々の観察することができ、互いに話すことができる√正常なセクシュアリティを作り出すのである。そして、現実の個々の特定の機会ただそこにおいてのみ、あたりまえの話や行動の現実に見える呈示を通して、そうした正常なセクシュアリティは生み出されているのである」⁽¹¹⁾と(ガーフィンケル「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたか」同二九〇—二九三頁)。

三 リアリティ分離⁽¹²⁾

(一) ボルナーは「世界は客観的に存在し、皆に共有されているという前提にもとづいた推論体系」を「現世的推論 (mundane reasoning)」と呼ぶ(『エスノメソドロジ』五三頁)。「……この世界について相矛盾した複数の経験があったとしたら——これからそれをリアリティ分離 (reality disjuncture) と呼ぼう——それは私たちを途方にくれさせる出来事だ」(同四一—四二頁)。「たとえば幻覚としてレッテルを貼られる経験には、それが成立する前提として、世界を実際にあるがままの姿で映しだしているとみなされる世界経験がある。まさにこの世界経験を準拠点として、他の世界経験が吟味され、誤った世界経験とされるのである」。「実際、リアリティ分離はいまだ完成途上にある経験を皮肉ることである。それが完成途上だというのは、互いに競合する世界経験のうちからどれを決定的な世界経験として選択するのかまだ決まっていらないからである」(同四六—四七頁)。ここで選択とは「同一

のものを経験するいく通りかの仕方から一つを選択することである。「私たちは常識的推論を非常に巧みに実践しているために、こうした選択をするのにとりたてて深く考えることをほとんどしない」。「しばしばこの選択自体がごく自然であり、またさまざまな選択肢を吟味し、その中から一つを選びだし、決定を下すという実践もごく自然に見える。それはまるで他に有効な選択がありえないように見えるほどだ。そのために、リアリティ分離が起こっている状況に内在する問題性が眼前から覆い隠されてしまうのである」(同四九頁)。「現世的推論の実践者にとつてリアリティ分離という問題は競合するリアリティ経験のどちらかが(あるいは両方とも)例外的な方法を使って、観察し、経験し、報告したりしたために生じてきたのだと考えることでいつも説明される」。「法制度や精神医療制度は、慢性化したリアリティ分離の博物館である」(同五三―五四頁)。「……競合する世界経験からどれか一つを選択する時、それはただ実証的観点や論理的観点からのみ選択せざるをえなくなるわけでは決してない。なぜならこれは、経験的にも論理的にも自己を正当化する自己完結的なシステムのうちから一つのシステムをえらぶ選択であるから。それゆえに、自己の世界経験が正しいという信念を放棄することは、実存的な跳躍といった色あいを帯びることになる」(同五八頁)。「リアリティ分離のまさにその本性によつて、すなわち、他者が自己と矛盾するよう世界を見、そして経験するという事実によつて確実になるのは、ある特定の世界経験を『実際に起こった出来事』の決定的世界経験として選択したとしても、一般的な支持は得られないということである。それにもかかわらず、次の推論の土台として(競合するさまざまな世界経験が存在する可能性があるにもかかわらず、それに抗つて)ある特定の世界経験にもとづいて行為する決定をしたとすれば、それには必然的に政治学が伴う」。「それはしばしば『経験の政治学』というポリティカルな活動である」と(同七二―七三頁)。

(二) ボルナーはこの論文においてガーフィンケルの他に、R・D・レーン、シュッツ、カール・マンハイム、ク
 ーン、バーガー／ルックマンを引用しているが、最後の締めは、マイケル・ポランニである。「こうした政治学を
 明らかにすることに価値があるとすれば、それは自己の世界経験を確立し、それを使う時に入り込んでくる個人的
 なコミットメントに対して私たちが気づくようになることである。マイケル・ポランニがかくも辛らつに論じ、ま
 た証明したように、『すべての知るといふ行為には、知られつつあることを知りつつある人の、暗黙ではあるが情
 熱的関与がはいりこんでいる。しかも、……このような共同作用因はけっして知識が不完全だからでなく、あらゆ
 る知識の必須条件なのである』。ポランニが『情熱的関与』、あるいはべつの箇所で『コミットメント』と呼ぶこと
 は、『(コミットメントを行う人とそれを記述する論者の両方によって) 非個人的に存在すると思われること
 を探求し、そしてついにはそれを受け入れる個人的な選択なのである』と(同七三頁)⁽¹³⁾。

おわりに

(一) これまで、日々の生活世界、われわれの日常生活の世界における経験の構造に関する代表的な分析をや詳
 しく見て来た。確かに、それぞれの論者によって力点のおき方は違うけれども、ガーフィンケルが言う日常生活世
 界の「見られているが、気づかれていない (seeing but unnoticed)」経験の組織原理を明らかにしている、とい
 うことは言える。用語の点でも、スキーマ、フレーム、スクリプトというキー・ワードによって整理できよう。日々

の生活世界における経験の構造に関して、われわれの理解は促進されたものと思う。既に相当な分量になったので、簡単に、今日の日本における物語論の状況に触れて、われわれが日常生活において、いかに物語を必要としているか、物語によっているかを述べたい。特に犯罪や非行と、それに対する対応という場面においては、そのようなのである。

(二) われわれは気がついていないかも知れないが、今、現在の日本において、いかに多くの物語が語られているかについて、大塚英志は「物語消費論」を提起している。⁽¹⁾現代日本という、この高度な消費資本主義社会においては、かつての国家・地域社会・学校・職場・家族といった疑似的な共同体の拘束力は、極めて不確かである。それはわれわれの〈アイデンティティを扱う仕事 (identity work)〉／そのものが、多元的・断片的で、ゲームの様相を呈しているからである。大きな物語の消失という、〈ポスト・モダン〉的状況は確かにあるのである。しかし、〈アイデンティティを扱う仕事〉をやめることはできない。一九八〇年の〈新宿バス放火事件〉以来の、いわゆる〈実存犯罪〉、つまり、自分の実存・アイデンティティの証明をかけた、激烈な犯罪は、人間にとって〈アイデンティティを扱う仕事〉がいかに根本問題を示している。少なくともある物語に浸っている間は、アイデンティティなど思い煩う必要がない。しかし、それは全くつかの間のことで、物語への飢餓感は決して満たされることはない。そこで、過剰な物語が生産され、消費されることになる。

(二) ここで大塚が念頭においているのは、演劇・映画というよりは、マンガ・アニメ・ゲーム、そして多くの商品(大塚はビックリマンチョコレートを例に挙げる)、あるいはデスコや東京デズニールランドである。大塚は〈物語消費〉について以下のように整理する。①送り手は〈物語〉の全容を受け手に示さない。あくまで〈物語〉を微

分化した形で受け手に示す。ここで微分化とは、ストーリーを想起させるあるシチュエーションやキャラクターに関する情報を無秩序に、総和しただけではストーリーを構成できないように示すことを言う。②受け手はこの微分化された情報を手がかりに〈物語〉を再構成する。それは疑似的な創作である。③〈物語消費〉における消費の動機づけはこの創造の快楽、〈物語〉を作り出すことへの衝動である。人は自らもまた〈物語〉を語りたいのだが、提供された情報によって比較的容易に創作ができる。しかし、この〈物語能力〉は世代によっても違ひ、人それぞれである。④〈物語消費〉とは消費者に疑似的な〈物語〉の創作を体験させ、その過程もしくは全体が何らかの形で、消費行動としての側面を持っている場合をいう。

大塚は服部幸雄を引用して、歌舞伎・人形浄瑠璃の劇作用語として、「世界」と「趣向」によって〈物語消費〉を説明する。「世界」とは作品、たとえば、『仮名手本忠臣蔵』の背景となる時代・事件、実際には、登場人物の役名・役柄、相互関係、基本的な筋・局面・展開など。『仮名手本』は江戸時代の赤穂浪士の仇討ち事件を太平記の時代に持ち込んで作られているが、当時の江戸時代の人々にとっては周知の通俗史・伝承に基づいている。「趣向」とは、そのような「世界」の上に新しく案出された脚色である。⁽²⁾アニメやゲーム、商品開発においては「世界観」と言われているのが、「世界」であり、一回分のアニメ・ゲームが「趣向」に相当する。〈大きな物語〉と〈小さな物語〉と言っても良い。アニメやゲーム、あるいはチョコのおまけシールに至るまで、壮大な神話的物語が用意されているのである。

(三) このような〈物語〉の必要性は、膨大な量の映画(ビデオを含めて考えれば、今でも巨大市場である)・演劇・TVドラマ、小説・マンガだけではなく、マンガ同人誌の流行、アニメやゲームのキャラクターに扮するコ

スチューム・ブレール、占いの流行、新興宗教の林立とオカルト・ブーム等の現代の諸現象に読み取れるところである。また、精神療法（たとえば、ユング派の「箱庭療法」）における「物語」の癒し効果も注目⁽³⁾に値する。

先にも指摘した通り、犯罪・非行の理解と、それに対する対応策を考える場合にも、「物語」の力は大い⁽⁴⁾い。この点についても既に物語論のプログラム論文で引用した大塚が言うように、犯罪は物語化することによって初めて理解可能となる、あるいは少なくとも多くの人々にとってはそうであると言えよう⁽⁵⁾。この点では赤坂憲雄の異人論に基づく異人排除・供犠・スケープゴート論にも注目すべきである。いずれも、柳田国男の民俗学につらなるところが興味を引く。神話・民話・伝承・昔話あるいは古くからの童話など、いずれも「物語論」につながるのである。

II・はじめに・第一章

(1) たとえば、矢崎光圀『日常世界の法構造』、一九八七年。

(2) G・サーサス「エスノメソドロジー——社会科学における新たな展開」G・サーサス／H・ガーフィンケル／H・サックス／E・シエグロフ（北澤裕／西阪仰訳）『日常性の解剖学——Ethnomethodology』一九九五年（新版）、二二・一四頁。

(3) Harvey Sacks, On doing "being ordinary", in: J. Maxwell & J. Heritage (ed.), Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis, 1984, pp. 413-429. 本文の頁数はこの論文のものである。

(4) Sheldon E. Messinger, Harold Sampson & Robert D. Towne, Life as Theater: Some Notes on the Dramaturgic Approach to Social Reality, in: Dennis Brissett & Charles Edgley (ed.), Life as Theater: A Dramaturgical Source Book 2nd ed., 1990, pp. 73-84.

- (5) ローゼンハーンの研究によれば、実験で精神病院に入院させた「偽患者」達が、自分達が実験で入院した偽の患者であることを病院のスタッフに納得させて退院することは困難であった。偽患者達のその旨の主張も、精神障害の徴候であると受け取られたからである (Rosenhan, On being sane in insane places, *Science*, 1973, 179, pp. 250-258. リンゼイ／ノーマン (中溝幸夫／箱田裕司／近藤倫明訳) 『情報処理心理学入門Ⅲ』(第二版)、一九八五年、一七九—一八一頁による)。
- (6) (8) コフマン (石黒毅訳) 『アサイラム』が引用されているが、コフマンについては後述する。
- (7) Stanley Cohen & Laurie Taylor, *Escape Attempts: The Theory and Practice of Resistance to Everyday Life*, 1976, pp. 9-24. コーエンとテイラーは長期受刑者がわれわれと同じ種類の問題に直面していることに気付いて、この本を書いたのである。

- (9) Theodore R. Sarbin, *The Narrative as a Root Metaphor for Psychology*, in: Th. R. Sarbin (ed.), *Narrative Psychology: The Storied Nature of Human Conduct*, 1986, pp. 3-21. John A. Robinson & Linda Hawpe, *Narrative Thinking as a Heuristic Process*, in: Sarbin (ed.), op. cit., pp. 111-125.

- (10) この章はほとんどが認知科学の概説書に基づいているが、繁雑さを避けるために、ここで一括して引用・参照文献を掲げ (著者・編者のアルファベット順)、以下の引用は整理記号と頁数だけによるものとする。J・R・アンダーソン (富田達彦／増井透／川崎恵里子／岸学訳) 『認知心理学概論』、一九八二年 (アンダーソンで引用)。

A・バール／E・ファンゲンバウム編 (田中幸吉／淵一博監訳) 『人工知能ハンドブックⅠ』、一九八三年 (バール／ファンゲンバウムⅠ)。

M・A・ボーデン (野崎昭弘／村上陽一郎／広松毅監訳) 『人工知能と人間』Ⅰ・Ⅱ、一九八六年 (ボーデンⅠ・Ⅱ)。

H・H・クラーク／E・V・クラーク (藤永保／小管京子／酒井たか子／秦野悦子訳) 『心理言語学——心とことばの

研究』上、一九八六年（クラーク／クラーク）。

M・ドゥ・メイ（村上陽一郎／成定薫／杉山滋郎／小林傳司訳）『認知科学とパラダイム論』、一九九〇年（ドゥ・メイ）。

H・ガードナー（佐伯胖／海保博之監訳）『認知革命——知の科学の誕生と展開』、一九八七年（ガードナー）。

J・J・ギブソン（古崎敬／古崎愛子／辻敬一郎／村瀬旻訳）『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』、一九八五年（ギブソン）。

P・N・ジョンソン・レアード（海保博之／中溝幸夫／横山詔一／守一雄訳）『心のシミュレーション——ジョンソン・レアードの認知科学入門』、一九八九年（ジョンソン・レアード）。

P・H・リンゼイ／D・A・ノーマン（中溝幸夫／箱田裕司／近藤倫明訳）『情報処理心理学入門』（第二版）Ⅱ・Ⅲ、一九八五年（リンゼイ／ノーマンⅡ・Ⅲ）。

Jean M. Mandler, *Stories, Scripts, and Scenes: Aspects of Schema Theory*, 1984 (Mandler).

M・ミンスキー（安西祐一郎訳）『心の社会』、一九九〇年（ミンスキー）。

M・ミンスキー他（佐伯胖編）『認知科学の基底』、一九六六年（ミンスキー他）。

U・ナイサー（古崎敬／村瀬旻訳）『認知の構図——人間は現実をどのようにとらえるか』、一九七八年（ナイサー）。

D・E・ルーメルハート（御領謙訳）『人間の情報処理——新しい認知心理学へのいざない』、一九七九年（ルーメルハート）。

ステイリングス／ファインシュタイン／ガーフィールド／リスランド／ローゼンバウム／ワイスラー／ベーカー／ワード（海保博之／牧野義隆／吉田茂／川崎恵里子／坂口恭久訳）『認知科学通論』、一九九一年（ステイリングス他）。

戸田正直・阿部純一・桃内佳雄・住佳彰文『認知科学入門——「知」の構造へのアプローチ』、一九八六年（戸田他）。

P・H・ウインストン編(白井良明/杉原厚吉訳)『コンピュータビジョンの心理』、一九七九年(ウインストン)。

(11) 認知科学、特に、コンピュータ・サイエンスが直面する倫理的問題や、根本的な限界についてはここでは触れない。

これについてはボーデンⅠ・Ⅱ、特にⅡの二三―一四章を参照されたい。また、ギブソン夫妻といわゆるギブソン主義者の研究は今後も大きな意味を持つと思われるが、ここで問題にするのは「視覚」の問題ではないので、この点を取り上げない。この点で参照すべきは、ギブソンの他、たとえば、広松渉『表情』、一九八九年、村田純一「形の知覚——ゲシュタルトをめぐる心理学と哲学」新田義弘他編『現代思想』第一巻『思想としての二〇世紀』、一九九三年、三三七―二八七頁。

(12) ガードナー、一〇―一五・二六―二九頁。なお、認知科学の歴史については、ガードナーを参照されたい。

(13) ブルナー他(岸本弘他訳)『思考の研究』、一九六九年、七頁。訳文変更。

(14) ナイサー、七―八頁。

(15) バートレットについてはアンダーソン、一六〇―一六二頁、クラーク/クラーク、二〇七―二〇九頁の他、ガードナー、一二三―一二四・一二二―一二三頁。

(16) F・C・バートレット(宇津木保他訳)『想起の心理学』、一九八三年(原著は一九三二年刊)、二四四頁。訳文変更。

(17) 戸田他一二三―一二三頁。

(18) 単語や概念化とスキーマにつきアンダーソン、一三三―一五六頁、文化と概念化された世界についてはガードナー、二章を参照されたい。

(19) 以下の引用はルーメルハート、一七八―一九五頁による。物語スキーマについては、著者により内容がいろいろであり、論争中でもあるので取り上げない。これについてはMandlerを参照されたい。

(20) フレーム理論は一九七四年にミンスキーが論文「知識を表現するための枠組」(ウインストン、二三七―三三三頁)で

提起したものである。ミンスキーは言う。「フレイムという考え方自身は、とくに新しいものではない。それはバートレットの『スキーマ』やクーンの『パラダイム』の伝統の中に存在する」(ウインストン、二四〇頁)。「クーンは、彼自身の非常に有効な再記述の「ための概念である」パラダイムを「大きな科学革命」のレベルにおいて適用しようとしているのに対して、私には、同じ考え方が日常的な思考の小世界にも適用できるように思われる」(同三〇八頁)。ミンスキーの最近の考え方は「心の社会」、すなわち、「心がたぐさんの小さなプロセスからできているという考え方」である。「心を構成する小さなプロセス一つひとつをエージェントと呼ぶことにする」(ミンスキー、二頁)。ミンスキーの言う「エージェント自体にはどれ一つとして知能がないことを、いつも確認しておかなければならない」、しかし、「外側から見ると……自分の下位エージェントたちがお互いの助けを借りてみんなで何かを達成するのを、自分でしているように見える」が、この見方による場合をミンスキーはエージェンシーと呼び、区別する。たとえば、「自動車には、車輪の軸を変えるロッドを引くためのギヤがあり、さらにそのギヤを入れるシャフトがあつて、エージェントとしてのハンドルは、このシャフトを回転させる」。しかし、われわれは「自動車を運転しているときは、ハンドルを車の方向を変えるのにつかえるエージェンシーだとみなしている」と(ミンスキー、一五—一六頁)。以後は原則として「心の社会」によってフレイム理論を述べる。斬新な構想に基づいて一九七四年論文にはない新しい考え方・術語が展開されている。本文中の頁数は、『心の社会』のそれである。なお、デバッキング(虫取り)についてはミンスキー論文(ウインストン、三〇八—三一〇頁)を見よ。

なお、フレイム理論の位置付けについては、たとえば、ナイサーは自分のスキーマ理論と多くの共通点が見られるとし(ナイサー、六一頁)、ジョンソン・レアーは簡単に言及し、ルーメルハートはシャंक他を「言語理解の図式理論」としてスキーマ理論と区別せず、ミンスキーは文献として引用するだけである。リンゼイ／ノーマンとアンダーソンは全く言及していない。ミンスキー自身はスキーマには言及せず、シャंक他のスクリプト論はフレイム理論に含めて扱い、独

自に狭いスクリプト概念を使っている。本稿では、シャンク他のスクリプト論は別に扱う。独自の展開が考えられると思うからである。

- (21) 人や人の集団、人種、民族、国民性などの対人的な経験を構造化するスキーマ・フレームもわれわれにとつて極めて重要である。ステレオ・タイプ、特に人種・民族・国民性に関するそれが、虐殺と虐待、差別と偏見の源となつて来たことは、看過できない。しかし、ステレオ・タイプについて研究して来たのは主として社会心理学であるから、認知科学に関する本稿では取り上げない。参照した文献でこれに触れているのは、アンダーソン、一六二—一六九頁、リンゼイ／ノーマン、一七六—一九二頁、ステイリングス他、四二—四三頁。なお、社会心理学の文献としてはたとえば、E・アロンソン(古畑和孝監訳)『ザ・ソーシャル・アニマル——人間行動の社会心理学的研究』第六版、一九九四年を参照。

- (22) バートレット(ミンスキー、三九三頁による)。

- (23) スクリプトとプランについては、アンダーソン、一五六—一六二頁。パール／ファイゲンバウム、二六六—二七六・三八—四〇一頁。ボーデン、I 四章、II 一章。ドウ・メイ、二—一章。リンゼイ／ノーマン、一九五—一九七頁。Mandler, pp. 75-86. ミンスキー、二六章。ルーメルハート、一九五—二〇〇頁。ステイリングス他、三八—四二頁。戸田他二三章。ミンスキー論文(ウインストン、二六三—二八七頁)。スクリプト理論の最近の修正・拡大については戸田他、一六二—一六五頁。本文中に参照文献を示した。

- (24) Stanley Cohen/Laurie Taylor, op. cit., pp. 50-55.

第二章

- (1) Stephen H. Riggins, Introduction, in: S. H. Riggins (ed.), *Beyond Goffman: Studies on Communication, Institution, and So-*

cial Interaction, 1990, p. 1.

- (2) ギデンスは言う。「そして私が更に提案したいのは、ゴフマンは確かに、主要な社会理論家として、人間の社会生活の研究に対する体系的なアプローチを展開し、その貢献がこの点で上に述べたその他の個人の誰か〔挙げられているのは Parsons, Merton, Foucault, Habermas, Bourdieu である——筆者〕のそれと実際同じくらいに重要な著述者として位置付けられるべきである」と。以下、ゴフマンに対する誤解とその批判は Anthony Giddens, Goffman as a systematic social theorist, in: Paul Drew/Anthony Wootton (ed.), *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, 1988, pp. 250-279 にある。引用はこの論文の二五二―二五五頁(参照: 今枝法彦『ギデンスと社会理論』一九九〇年、一八一―一九頁)。なお、エラマッセルギーの面びのゴフマン批判については、Dennis Brissett/Charles Edgley, *The Dramaturgical Perspective*, in: D. Brissett/C. Edgley (ed.), *Life as Theater: A Dramaturgical Source Book*, 2nd. ed., 1990, pp. 1-46 を参照された。

- (3) Erving Goffman, *The interaction order, American Sociological Review*, 48, pp. 1-17, 1983. これは会長就任論文であるが、病氣のために講演はできなかった (D. Brissett/C. Edgley, op. cit., p. 41.)。
- (4) E. Goffman, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, 1963, p. 5.
- (5) アルビン・クルドナー(栗原/瀬田/杉山/山口訳)『社会学の再生を求めて』三巻、四九一―六七頁。バーガー/ルックマン(山口節郎訳)『日常世界の構成』一九七七年、三四五頁。
- (6) Eric Schwimmer, *The anthropology of the interaction order*, in: S. H. Riggins (ed.), *Beyond Goffman*, pp. 41-63.
- (7) E. Goffman, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, 1986, pp. 13-14. (本文中の FA は頁数で引用)。

- (8) Bennett, M. Berger, Foreword, in: E. Goffman, *Frame Analysis*, p. xvi. A. Giddens, op. cit., pp. 270-279.
- (9) A. Giddens, op. cit. の他 'A. Giddens, *The Constitution of Society*, 1984 ヲギズメス (松尾／成富／西岡／小幡／叶堂／立松／松川／内田訳)『社会学』、一九九三年など。
- (10) 安川一編『ゴフマン世界の再構成——共在の技法と秩序』、一九九一年。Jason Dittton (ed.), *The View from Goffman*, 1980. Drew Paul/Anthony Wootton (ed.), *Erving Goffman*, 1988. Stephen H. Riggins (ed.), *Beyond Goffman*, 1990 の掲載論文よりもまとまっている。
- (11) 以下、本文で引用するのは最も理論的な注(7)のゴフマンの著書である。紙数のために他の著書は取り上げられなかった。安川一編・前掲書を参照されたい。
- (12) Paul Bouissac, *Incidents, accidents, failures: The representation of negative experience in public entertainment*, in: S. H. Riggins (ed.), *Beyond Goffman*, pp. 409-443. 有名な芸人ジョージ・カールの分析。
- (13) Christian Heath, *Embarrassment and Interactional Organization*, in: P. Drew/A. Wootton (ed.), *Erving Goffman*, pp. 136-160.

第三章

- (1) ここで参照・引用した文献を一括して掲げる。
 シュッツ (佐藤嘉一訳)『社会的世界の意味構成』、一九八二(一九三三年)『社会的世界』で引用。
 シュッツ (森川眞規雄／浜日出夫訳)『現象学社会学』、一九八〇年(『現象学社会学』で引用)。
 Alfred Schutz (ed. and introduced by Maurice Natanson), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, 1990. (CP I

で引用)。

Alfred Schutz (ed. and introduced by Arvid Brodersen), *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, 1976. (CP II ㉔ ㉕ 用)。

Alfred Schutz (ed. by I. Schutz and introduced by Aron Gurwitsch), *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, 1975. (CP III ㉔ ㉕ 用)。

Alfred Schutz/Thomas Luckmann, *Strukturen der Lebenswelt* Bd. 1, 1979, Bd. 2, 1984. (*Lebenswelt* Bd. 1, Bd. 2 ㉔ ㉕ 用)。

シュッツ著作集(渡部光/那須壽/西原和久訳)第一卷『社会的現実の問題』[I](一と頁数で引用)。

同(同訳)第二卷『社会的現実の問題』[II](二と頁数で引用)。

同(同訳)第三卷『社会理論の研究』(三と頁数で引用)。

広松渉『現象学的社会学の祖型』A・シュッツ研究ノート、一九九一年(「祖型」で引用)。

西原和久編著『現象学的社会学の展開』、一九九一年(「展開」で引用)。

森元孝『社会科学の自由主義的転換の構想とその時代 アルフレート・シュッツのウィーン』、一九九五年(「シュッツのウィーン」で引用)。

(2) 浜日出夫/西原和久「両義性を生きる——問題としてのシュッツ」、張江洋直「シュッツと解釈学的視座——その二義性」あるいは「知」の往還運動としての『現象学的社会学』・『展開』一章と二章。

(3) 広松「祖型」一五八—一五九頁の注(7)。「自然的態度の構成的現象学」については、広松「祖型」vi頁の索引掲載の頁を参照せよ。

- (4) シュッツ『現象学的社会学』三六四頁(用語解説はこの著書の編者ヘルムート・ワグナーによる)。
- (5) アンソニー・ギデンズ(松尾精文/藤井達也/小幡正敏訳)『社会学の新しい方法規準——理解社会学の共感的批判』、一九八七年、三二頁。この日常生活世界がいかに確固として感じられる特権的性格のものかについては、村上陽一郎『科学と日常性の文脈』、一九七九年を参照せよ。
- (6) CPl, pp. 120-134. (訳本は三・一七一一八九)。訳文一部変更。
- (7) 浜日出夫・前掲論文一五一一七頁。
- (8) このような「学問的態度」についての批判はDorothy E. Smith, 'The Everyday World as Problematic: A Feminist Sociology', 1987を参照せよ。また、論理や理性に基づく伝統的な社会科学の方法では、少数者や反対者の立場は汲み尽くせないとして、物語論が展開されているのであるが、法学、特に刑事法学にも言及しているPeter Brooks & Paul Gewirtz (ed.), *Law's Stories: Narrative and Rhetoric in the Law*, 1966を参照されたい。
- (9) A・ギデンズ(宮島/江原/森反/俣田/本間/田中/百々訳)『社会理論の現代像』、一九八六年、四・九〇頁。シュッツの時代にはハンソンの「理論負荷性」論(ハンソン(村上陽一郎訳)『科学的発見のパターン』、一九八六年、同(野家啓一/渡辺博訳)『知覚と発見』、一九八一年)も、クーンの「パラダイム」論(クーン(中山茂訳)『科学革命の構造』、一九七一年)も展開されていないし、シュッツの理解は科学二元論に立つディルタイ・リッケルト・ウェーバーのそれであって、ガダマー・リククール以降の「解釈学的転回」のそれではない。今日ではトウルミンの言う「ポスト近代科学」(量子力学・精神分析学・生態学など)だけではなく、物理学を含めた自然科学においても、「事実の感覚・知覚+解釈」の二段階ではなく、理論・パラダイムに基づく観察、つまり、観察事実の理論負荷性は一般に承認されている。しかし、シュッツの主張は「二重の解釈」であるから、解釈学的転回後も維持できよう。解釈学的転回以後の科学については、野

家啓一『科学の解釈学』、一九九三年を参照されたい。なお、張江洋直「シュッツと解釈学的視座」・西原編『展開』第二章。

- (10) 村上陽一郎・前掲書は日常言語と理論言語によって、自他不可分の赤ん坊時代の△原われわれ△から多元的な△われ△と△われわれ△、そして多元的な△世界△が成立することを論じている。なお、参照、張江他『リアリティの社会学——社会学入門』、一九九〇年、第一部第一章。

- (11) シュッツの『社会的世界の意味構成』については訳本としては『社会的世界』が、読解としては広松『祖型』、森『シュッツのウィーン』、要約の英訳（トーマス・ルックマンによる）はCP II, pp. 20-63（邦訳は三・四三—九六頁）がある。

もう一点だけ触れておこう。それは「視界（パースペクティヴ）の相互性」という常識的知識の相互主観性の中心を成す考え方である（その他は、知識の社会的起源あるいは知識の発生的社会化と、知識の社会的配分）。個人間の視界の相違は、常識的な思考においては、次の二つの根本的理念化によって乗り越えられる。(i) 立場の相互交換可能性の理念化 彼の「ここ」が私の「ここ」になるように彼と立場を交換するならば、私は諸々のことがらに對して、彼が実際にそうしているのと同じの類型性によって、それらのことがらを見るようになるであろうということ、そしてその場合さらに、彼の到達可能な範囲の内に実際に存在しているのと同じのことがらが、私の到達可能な範囲の内に存在するようになるであろうということ、以上のことを私は自明視している——そしてまた私は、その彼も同じことを自明視していると想定している。(その逆のこともまた成り立つ)。(ii) 関連性の体系の相応性の理念化 私と彼のそれぞれ独自の生活史的状况に起源を有する視界の相違は、お互いの当面の目的にとっては関連がないということ、また私と彼、つまり「われわれ」は、実際に共通な、あるいは潜在的に共通な対象とその特徴を、同一の様式で、または少なくとも「経験的に同一の」様式で、すなわちあらゆる実践上の目的にとって十分に同一といえる様式で選定し解釈していると、両者ともが想定しているとい

うこと、以上のことを私は、反証が挙げられるまでは自明視している——そしてまた私は、その彼もまた同様に同じことを自明視していると想定している。このように私によって自明視されている世界の局面は、私にとって個人的な他者であるあなたによっても、「われわれ」、つまり「われわれのうちのひとりであるすべての人」によっても自明視されているのである(一・五九—六一頁)。

第四章

(1) 本章で参照・引用する文献を一括して掲げる。

山岸 健編著『日常世界と社会理論——社会学の視点』、昭和六十二年(『日常世界』で引用)。

ガーフィンケル／サックス／ボルナー／スミス／ウィーダー(山田富秋／好井裕明／山崎敬一編訳)『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』、一九八七年(『エスノメソドロジー』で引用)。

サーサス／ガーフィンケル／サックス／シエグロフ(北澤裕／西阪仰訳)『日常性の解剖学——Ethnomethodology: 知と会話』、一九九五年(『日常性の解剖学』で引用)。

好井裕明編『エスノメソドロジーの現実——せめぎあう〈生〉と〈常〉』、一九九二年(『現実』で引用)。

Harold Garfinkel, *Studies in Ethnomethodology*, 1967 (Garfinkel で引用)。

John Heritage, *Garfinkel and Ethnomethodology*, 1984 (Heritage で引用)。

Melvin Pollner, *Mundane Reason: Reality in everyday and sociological discourse*, 1987 (Pollner で引用)。

Graham Button (ed.), *Ethnomethodology and Human Sciences*, 1991 (Button で引用)。

(2) エスノメソドロジーの命名の由来についてはガーフィンケル「エスノメソドロジー命名の由来」『エスノメソドロジー』

九一八頁。沿革についてはサーサス「序論 エスノメソドロジ——社会科学における新たな展開」「日常性の解剖学」五—三〇頁、水川喜文「エスノメソドロジの歴史的展開」「現実」二〇三—二二五頁。

(3) 伝統的社会科学・人間科学・社会学とエスノメソドロジの關係の連続性と断絶性については、HeritageとButtonが良い文献である。前者はむしろ連続性に、後者はむしろ断絶性に力点がある。

(4) Harold Garfinkel, Respecification: evidence for locally produced, naturally accountable phenomena of order, logic, reason, meaning, method, etc. in and as of the essential haecceity of immortal ordinary society, -an announcement of studies, in: Button, pp. 10-19, es. p. 11-12, 14.

(5) cf. Heritage, ch. 2.

(6) Garfinkel, in: Button, pp. 16-17, への論文は圧縮しすぎのために、平明な日本語に移すとは難しい。

(7) Lena Jayyusi, Values and moral judgement: communicative praxis as moral order, in: Button, pp. 227-251.

(8) H. Garfinkel, Studies of the routine grounds of everyday activities, originally, Social Problems, 1964, vol. 11, no. 3, pp. 225-250, now in: H. Garfinkel, Studies in Ethnomethodology, 1967, pp. 35-75. 邦訳『日常性の解剖学』三一—九二頁。最初の陪審員の研究論文は Garfinkel, Some rules of correct decisions that jurors respect, in: do, Studies, pp. 104-115.

(9) これはガーフィンケルがカール・マンハイムの知識社会学から採用した方法である。「マンハイムによれば、例証的方法 (documentary method) とは、極めて多様な、全く違った意味の実現の基底にある同一の相同的パターンの探求を必要とする。この方法は実際の出現を前もって想定された基底的パターンの『例証』として、そのパターンを『指示するもの』として、パターンを『代表する』ものとして取り扱うことである。基底にあるパターンがその個別的な例証の証拠から引き出されるだけでなく、個別的な例証の証拠が、それはそれで基底にあるパターンについて『知られていること』に基

づいて解釈される。それぞれが他方を入念に仕上げるために用いられるのである」と (Garfinkel, *Common sense knowledge of social structures: the documentary method of interpretation in lay and professional fact finding*, in: *do. Studies*, p. 78.)。

この方法をもっとも雄弁に用いて、意味が内部から生成する過程そのものを描いているのはローレンス・ウィーターの論文「受刑者コード」である(『エスノメソドロジー』一五五—二四頁。これはLawrence Wieder, *Language and Social Reality*, 1974の要約である)。「コードや他の何らかの規範的秩序は、演繹的理論の要請するような、行為パターンの適切な説明にはならない。なぜならそれを説明として使用しても、状況、行為、規則は、独立した要素ではないからである。コード(あるいは他の規範的秩序)が基礎にしている発話や行動は、それだけで明示的意味や発話や行為を説明しつくすような意味を、互いに独立した形でもつことは決していない。そうではなく、発話や行為は、それぞれが機能的な意味システム内の構成体であるように、現実に見られる具体的な状況を構成する部分として、それらの意味が相関的に決定される。すなわち、状況、行為、規則は、互いの意味をゲシュタルト構造の構成部分として決定しあうのである」(同二〇七頁)。ところでゲシュタルト構造についてウィーターはギルヴツィチを引用する。「あるゲシュタルト構造の部分はそれぞれ、その機能的な意義によって定義され、部分としての適切な資格があたえられているがゆえに、そして各部分の機能的な意義は、本質的に他の部分の意義に関連しているがゆえに、ゲシュタルト構造の部分あるいは構成体間には徹底した相互依存が存在する。ゲシュタルト性をもつ構造へと統合されるためには、構成体はそれぞれ、構造のなかである位置を占め、ある機能をもたねばならない。……ゲシュタルト構造の部分あるいは構成体間には、ゲシュタルトとしての首尾一貫性という特有の関係性が広がっている。この関係性は、各構成体の意味に関して構成体を互いに決定づけ、条件づけることとして定義される。徹底した相互関係性の点から、各構成体は、それぞれに、具体的な事例における適切な資格を

与える機能的な意義(意味)を互いに割り当て、またそれを互いから引き出すのである」(同一九三—一九四頁)。「私のコード分析を基礎づける発話はそれぞれ、それが、ある—文脈—で—社会的に—言われるから意味をもつのである。発話はどれも、文脈に意味を与え、当該の文脈にある発話の適切な場から意味を獲得する」(同一九四頁)。「……解釈のドキュメンタリの方法を用いることによって、『基底にあるパターン』と『ドキュメンタリーの証拠』が相互に洗練しあうが、それは、ゲシュタルト構造の意味(機能的な意義)と各部分が相互に決定しあうのと同じ形式的な構造をもつことに注意すべきである」(同一九五頁)。「……成員たちは具体的な場面での出来事の生起を規範的な—秩序—に従うこと—で—生み出された—行為—の—規則的な—パターン—の—諸事例として認めているからである」(同二七二頁)。「社会秩序が人々の関係のなかに存在し、それらを現実の認知や記述に利用できるのは、社会的—行為—を—説明するという作業に必然的にともなうさまざまな方法を用いて、人々がつねに、その場そのときに、人と人との間にさまざまな社会秩序を達成し、そうした秩序を現実の認知や記述に利用できるからなのである」と(同二〇九—二一〇頁)。

(10) ガーフィンケル自身がこの点を説明している他の論文で補完しよう。この論文では「その場その場でやること(Ad hocing)」と言っている。「アド・ホック的考慮は診療所のフォルダーから読み取られ得るものと、コードする人がコード紙に記入したものと的一致を決定する場合に、常に重要な考慮である。指示が如何にはつきりと入念に書かれていようと、そして厳格な保険統計上のコード規則が全ての項目毎に定式化できており、それによってフォルダーの内容がコード紙に書き込まれ得るにもかかわらず、コード紙への記入が診療所の活動の現実の出来事を報告しているという要求が推し進められねばならない限り、その場合には、全ての事例で、全ての項目に対して、『等々』、『でない限り』、『見逃せ』、『付随陳述書』が、コードする人がコード化指示を、実際のフォルダーの内容を分析するやり方として把握することに伴っているのである。それらの利用は同様に——コード紙が処理樹の出来事として用意し定式化した——その出来事についての報

告として、フォルダーの内容をコードする人が読むことを可能にするのである。『必要で』、『十分な』基準が、コード化指示によって手続的に定義されているわけではない。また、『等々』や『見逃せ』といったアド・ホック実務がコード化指示をできるだけのきりさせることによって、その存在・利用、利用の数や機会において統制あるいは排除されるわけでもない。そうではなく、アド・ホック考慮は、コードする人によって顧慮されるのであり、それらの指示がはつきりと語っていることを認識するために、アド・ホック実務が用いられるのである。アド・ホック考慮は、コード化指示がコード化の諸概念の『操作的定義』であることを認識するために、コードする人によって顧慮される。それらは、『必要で』、『十分な』基準と一致してコードされているという研究者の要求を、推し進め保証する根拠・方法として働くのである。『そうである』とすれば、コードする人が現実の診療所の出来事を見付けたとして満足すべきであるとするならば、彼は実際のフォルダーの内容を、診療所活動—における—社会秩序—であり、診療所活動—の—社会秩序を常に代理するものとして取り扱わねばならない。実際のフォルダーの内容は診療所の活動を代表するものとしての診療所の活動の社会的に秩序づけられたやり方を代表している。……コードする人は診療所の活動を知らなければならないと言う時に私が指摘しているつもりなのは、コードする人が実際の内容を秩序—の—出来事として認識するために見ているのは、コードする人がフォルダーの記録を記号—機能—として使っているという点なのである』と (Garfinkel, What is ethnomethodology?, in: Garfinkel, Studies, p. 21-23.)。

- (11) Garfinkel, Passing and the managed achievement of sex status in an intersexed person, part 1, in: do, Studies, pp. 116-185.

- (12) メルヴィン・ボルナー「お前の心の迷いです—リアリティ分離のアナトミー」『エスノメソドロジー』三九—八〇頁。詳しくは、Pollner, pp. 69-86を参照されたい。

- (13) この最後の引用部分はPolnerにはない。引用されているポランニはMichael Polanyi, *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy*, 1958, p. 312 and 302 (マイケル・ポランニー(長尾史郎訳)『個人的知識』——脱批判哲学をめざして、一九八五年、二九五・二八五頁)。引用されている文章を原文によって直した上で訳した。

おわりに

- (1) 大塚英志『物語消費論——「ビックリマン」の神話学』、一九八九年。同『見えない物語——「騙り」と消費』、一九九一年。参照、同『戦後まんの表現空間——記号的身体の呪縛』、一九九四年。
- (2) 服部幸雄『歌舞伎のキーワード』と服部幸雄他編『歌舞伎字典』参照。
- (3) この面では河合隼雄の一連の仕事が重要である。たとえば、『無意識の構造』、一九七七年。同『昔話の深層』、一九七七年。同『昔話と日本人の心』、一九八二年。同『日本人とアイデンティティ』、一九八四年。同『物語と人間の科学』、一九九三年。同・対談集『物語をものがたる』、一九九四年。なお、精神療法者エリック・バーン(南博訳)『人生ゲーム入門——人間関係の心理学』、一九六七年とその方法に基づくClaude Steiner, *Scripts People Live: Transactional Analysis of Life Scripts*, 2nd ed., 1990 も参照された。
- (4) 小野坂『物語論としての裁判論』法政理論二七卷三・四号一二二頁。
- (5) 赤坂憲雄『新編 排除の現象学』、一九九一年。参照、同『異人論序説』、一九八九年。私もスケープゴート論を述べたことがある、参照、小野坂『死刑のある社会と死刑のない社会』『死刑の現在』所収。